

To 縮約と空範疇と主要部移動

岩 本 弘 道*

To Contraction, Empty Categories, and Head Movement

Hiromichi IWAMOTO

Abstract

This paper investigates what is called 'to contraction phenomenon' in English. In early studies the phenomenon was dealt with by a syntactic cliticization rule which involves two conditions on its application, Adjacency Condition and Government Condition. But subsequently it has been demonstrated that the adjacency condition has some problems both conceptually and empirically. We claim that these problems will disappear if it is shown that the adjacency condition itself is unnecessary for the correct description of the contraction phenomenon, and that the head movement analysis can offer this possibility. Especially we propose through the modification of Zagana's (1988) analysis that a null tenseless Infl, ϕ_{to} , which is a kind of verbal affix, moves to the matrix contracted verbs that are listed in the Lexicon as contracted forms from the start in order to check its morphological feature. This head movement analysis of *to* contraction implies that there is in fact no independent rule of *to* contraction in the grammar, so that we can dispense with the problematic adjacency condition involved in it. Moreover, under this analysis the other condition, namely, the government condition, as well can be derived from the general principles in Universal Grammar (UG) that constrain head movement, or more precisely, movement operation in general.

0. 緒 言

英語には (1) に見られるように, *wanna* 縮約として知られる, *want to* を *wanna* と言ひ替える現象があり, これは (2) のように *want* と *to* の間に何らかの要素が介在すると阻止されるということが知られている。

- (1) a. You want to solve this problem.
b. You wanna solve this problem.
- (2) a. You want the student to solve this problem.
b. * You wanna the student solve this problem.

そこで, 一般にこの縮約現象は, 縮約規則が適用されるには *want* と *to* が S 構造で隣接していなければな

らないという内容の「隣接性条件」(Adjacency Condition) に従うとされてきた。しかしながら, 次のような例は, *want* と *to* が隣接していればいつでも *wanna* と縮約できるわけではないことを示している (cf. Lasnik (1990))。

- (3) a. The student, you want to solve this problem.
b. * The student, you wanna solve this problem.
- (4) a. Who do you want to solve this problem?
b. * Who do you wanna solve this problem?

(3) (4) ではどちらも, 本来 (2) のように *want* と *to* の間にあった *the student/who* という要素が移動変形により, 文頭の位置に移動されている。GB 理論では, 移動は移動元の位置に, 移動された要素と同一指標をふられた目に見えない要素である空範疇 (empty category) の一種としての痕跡 (trace) を残し, (3a) (4a) の S 構造はそれぞれ次のようになると分析される (以

下痕跡は t で示す)。

- (5) a. The student_i, you want [_{NP} t_i] to solve this problem.
 b. Who_i do you want [_{NP} t_i] to solve this problem?

そして、このように、S 構造に痕跡があることを仮定すれば、(3b) (4b) で *wanna* が用いられないことが、(2) でと同じように「隣接性条件」によって説明できることになる。そして、このことは、S 構造における痕跡、ひいては空範疇というものの実在性を示す証拠の1つとして、生成文法とりわけ GB 理論の入門書でしばしば言及されている。しかしながら、本稿で見ると、空範疇には PRO など他にもいくつかの性質の異なったものがあり、実際にはすべての空範疇が縮約を阻止するわけではないことも知られており、「隣接性条件」はそのままで記述的に不完全なものであると言える。また、文法理論における「隣接性」という概念そのものにも問題があることが知られており、こうしたことは、この「隣接性条件」の、ひいては縮約規則そのものの存在に疑いを投げかける可能性があることを示唆しているとも解釈できる。

本稿では、この隣接性条件にまつわるいくつかの問題点について考察し、それに対する妥当な説明の試みのいくつかを批判的に検討し、結局はこの条件がもたらす諸問題は、うまく解決することができないことを示し、独立した縮約規則と、それに伴うこの「隣接性条件」は不必要であることを主張するものである。結論としては、縮約規則は実はより一般的な主要部移動変形、Baker (1988) のいう編入操作 (incorporation) の一具現にすぎず、そのように分析することで、この「隣接性条件」とさらには縮約規則の適用に対するもう1つの条件となる「統率条件」の2つは、移動変形一般に対する普遍文法 (UG) の中の一般原理からの自動的な帰結として説明可能となることを示したい。

以下、本稿の構成は、次の通りである。まず1節で英語の *wanna* 縮約にはその適用に関して a) 「隣接性条件」と b) 「統率条件」が関与することを見る。続いて2節で、縮約規則に関与する空範疇にどのようなものがあるかを概観し、変項となる *wh* 痕跡以外の空範疇である、PRO や NP 痕跡を「隣接性条件」の例外としなければならないことを見る。同時に、*wanna* 縮約がさらに他の動詞でも見られる縮約現象を包含する *to* 縮約の一例にすぎないことを見る。3節では、こうし

た *wh* 痕跡の持つ空範疇としての例外性と語彙的 NP との共通性を GB 理論の格理論に注目してうまくとらえることに成功したとされる Jaeggli (1980) の一般化について検討し、その問題点を指摘する。特に Jaeggli が前提とする形態論的格フィルターに関する問題を指摘し、格フィルターは LF での項への θ 役割付与に関する「可視性条件」(Visibility Condition) から導き出されるものであることを見る。続く、4節、5節では、「可視性条件」を認めると、項である PRO への格付与が必要となるが、GB 理論の PRO 定理の予測とは異なり、PRO が格付与されるという仮定(空格分析)が正しいことを示す証拠を見る。そして6節で、格付与された PRO の存在が正しいとすると、Jaeggli の一般化にとって問題となり、再び「隣接性条件」が維持できなくなるが、VP 内主語仮説と PRO の格は VP 指定部で認可できるとすることで、この問題への解決を試みる Baltin (1995) の分析を検討し、その分析にも問題点があることを指摘する。続いて7節で、この隣接性の問題が Zagana (1988) の主要部移動分析を応用・修正することで、実は「隣接性条件」そのものは縮約規則にとって必要がないことを示す。同時にこの主要部移動分析によれば、縮約に関するもう1つの条件である「統率条件」も自然に導き出せることになる。最後に8節で、*to* 縮約現象の主要部移動による分析の持つ利点を整理し、最近の極小主義 (Minimalist Program) の流れにおいてこの分析の持つ意味合いを簡単に述べ結びとする。

1. *wanna* 縮約規則と隣接性条件

英語には *wanna* 縮約という現象がある。*wanna* 縮約とは、次の (6) でのように *want to* が *wanna* と連接される現象を指す。この現象はしばしば口語英語に見られるものである。

- (6) a. I want to see you.
 b. I *wanna* see you.

しかしながら、常に *want* と *to* が縮約できるわけではない。いくつかの条件がある。例えば、次に見るように *want* と *to* の間に不定詞の主語となる語彙的要素が介入している場合には *wanna* は使えない。

- (7) a. I want John to leave.
 b. *I *wanna* John leave.

このような場合を正しく排除するために, wanna 縮約規則には次の (8) ような「隣接性条件」が必要となる。

- (8) 隣接性条件:
wanna 縮約の適用のためには, want と to は隣接していなければならない。

また, wanna 縮約を許すのは動詞の want に限られる。want には名詞用法もあるが, その場合にはたとえ to が後続しても wanna になることはない^[1]。

- (9) a. I need that want to be satisfied.
b. *I need that wanna be satisfied.

縮約に関与する to も不定詞句の主要部となる時制屈折辞 Infl としての to のみが縮約され, (10) のように前置詞の to はいくら want に後続しても縮約されることはない(これは後に 2.3.2 で見る他の縮約現象についても言える)。

- (10) a. ?I want to some degree to visit your family.
b. *I wanna some degree to visit your family.

さらに, この他にも重要な条件として, 縮約を受ける時制辞の to を主要部とする不定詞節は want に統率されていなければならないという「統率条件」(Government Condition)がある。これは, 概略, 縮約される to が want の補部となる不定詞節の主要部でなければならない, という主旨の条件で, この条件により, 以下に見るような一見 want と to が隣接していても, wanna に縮約できない様々な例が説明される (cf. Aoun and Lightfoot (1984), Lobeck and Kaisse (1984), Postal and Pullum (1982))^[2]。

まず, (11) のように, 付加部である理由を表す不定詞節 (rationale clause) の to とは縮約できないが, これは (12) が示すように, この不定詞節が主動詞 want の補部ではなく, V の最大投射である VP の外部にあり, V によって統率されないからである (cf. Stowell (1983), Lobeck (1995))。

- (11) a. One must want (in order) to become an effective overconsumer.
b. *One must wanna become an effective overconsumer.
(12) [_{IP} One must [_{VP} want] [(in order) PRO

to become an effective overconsumer]]

さらに次のような例の意味を考えてみよう。

- (13) a. He says he's not going to annoy me. (AMBIGUOUS)
b. He says he's not gonna annoy me. (UNAMBIGUOUS)

(13a) は, to annoy me の部分が構造的に曖昧で, going の補部である解釈「彼は私を困らせようとしてはいいと言った」と, VP の外にある目的節としての解釈「彼は私を困らせるために, 行かないと言った」の2通りの解釈を持つが, (13b) のように wanna に縮約した場合には前者の補部としての解釈しかできない。このことは, 縮約が want によって統率された補部の to にしか適用されないという「統率条件」から自然に説明できる。また (14) のように to が不定詞節の主語である不定詞節の to である場合にも縮約はできない (Postal and Pullum 1982)。

- (14) a. I don't want to flagellate oneself in public to become standard practice in this monastery.
b. *I don't wanna flagellate oneself in public to become standard practice in this monastery.
c. I don't want [_{CP} [_{IP} [_{CP} [_{IP} PRO to flagellate oneself in public]]] to become standard practice in this monastery]

これは, (14c) の句構造分析が示すように, (14a) で一見 want に隣接している to は不定詞節の主語の中にあり, 下線を引いた2つ目の CP の部分が障壁となり統率を妨げているからである。ちなみに, 補文の不定詞節の to は want に統率されているが, こちらは隣接性条件を破っているために縮約されない。さらに (15) のような挿入句としての不定詞節の to も, 挿入句は want に統率されない位置に生成されることから, 「統率条件」によって縮約が阻止される (Postal and Pullum 1978: 17)。

- (15) a. I want, to be precise, a yellow, four-door De Ville convertible.
b. *I wanna, be precise, a yellow, four-door De Ville convertible.

これ以外にも、次のように問題となる *to* を主要部とする不定詞節が *want* の補部ではないような例が、この「統率条件」により正しく排除できる^[3]。

- (16) a. I don't want anyone who continues to want to stop wanting.
 b. * I don't wanna anyone who continues to want stop wanting.
 c. I don't want [_{CP} [_{IP} [_{NP} anyone [_{CP} who continues to want]]] to stop wanting]
- (17) a. It seems like to want to regret that one does not have.
 b. * It seems like to wanna regret that one does not have.
 c. It [_{VP} [_{VP} seems like [PRO to want]] [PRO to regret that one does not have]]

従って英語の文法には概略次の (18) のような *wanna* 縮約規則 (*wanna* contraction rule) が存在すると言うことができる。

- (18) *wanna* 縮約規則:
 [_v want] - [_{infl} to] → *wanna*
 条件: 1) 「隣接性条件」: *want* と *to* は隣接していなければならない。
 2) 「統率条件」: *to* を主要部とする節が *want* に統率されていなければならない。(すなわち、*want* の補部でなければならない)

2. 空範疇と縮約規則

上で見たとおり *wanna* 縮約は隣接性条件に従い、補部となる不定詞の主語のような語彙的要素が隣接性の障害物となり縮約規則の適用を阻止するわけだが、この *want* と *to* の隣接性を犯すのは、果たして語彙的要素だけであろうか? GB 理論では、移動に伴って生じる痕跡 (trace) など、いくつかの空範疇 (empty category) という、音形を持たない (書記言語では目に見えない) 要素 (一種の *place holder*) を仮定するが、実はこうした目に見えない要素も時に隣接性に関与することが知られている。そして、この事実が痕跡などの空範疇の存在の経験的根拠とされている

(Lightfoot (1976, 1977), Radford (1981), Ouhalla (1994) などを参照)。以下本節では、隣接性条件に関しては、語彙的要素ばかりでなく、こうした目に見えない空範疇も縮約を阻止する場合にどんなものがあるかを見て、隣接条件に関する事実を整理する。

2.1 非 A 位置への移動の痕跡

GB 理論の移動規則は移動の着地点の性質によって性質が異なることが知られている。一般に、述部が要求する項 (argument) が現れ、文法関係が指定される、主語の位置となる IP 指定部の位置や、動詞などの目的語が現れる補部の位置は A 位置 (argument position)、それに対して文法関係に関与しないそれ以外の位置は非 A 位置 (non-argument position/A-bar position) と定義される。そして、A 位置には D 構造で項が基底生成されうるが、非 A 位置に項が基底生成されることはない。従って S 構造で項が非 A 位置に現れる場合は、移動変形によることになるが、そうした非 A 位置への移動を、ここでは非 A 移動と呼ぶ。こうした非 A 移動には、CP 指定部への移動である *wh* 移動と、話題化変形 (Topicalization) のような付加移動がある。以下、こうした非 A 移動によって S 構造で残される痕跡と *wanna* 縮約現象について見ていく。

2.1.1 *wh* 移動痕跡

まず、*wh* 移動によって残される痕跡について考察しよう。例えば、次のような例を考えてみよう (Jaeggli 1980: 240)。

- (19) a. Who do you want to kiss?
 b. Who do you wanna kiss?
- (20) a. Who do you want to kiss you?
 b. * Who do you wanna kiss you?

ここで問題となるのは (19a) (20a) とともに *want* と *to* が隣接しているにもかかわらず、なぜ (20b) だけが *wanna* 縮約が許されないのかということである。そこで (19) (20) の文それぞれの派生について考えてみる。どちらも *wh* 移動規則によって、*wh* 句の *who* は基底構造の位置から文頭の CP 指定部へ移動している。痕跡理論では、移動された要素の元の位置は削除されず、そこには移動の痕跡として、移動された要素と同一指標をふられた空範疇 [_{xp}e] を残すと仮定される。この場合には *who* が名詞句なので、その痕跡は [_{NP}e] である。この派生を図示すると次の (21) (22) のようになる (痕跡は *t* で示してある)。それぞれ (a) が D 構造

で (b) が S 構造である。

- (21) a. [_{CP} [_C+WH] [_{IP} you want [to kiss who]]]
 b. [_{CP} who_i [_C do] [_{IP} you want [to kiss t_i]]]
 (22) a. [_{CP} [_C+WH] [_{IP} you want [who to kiss you]]]
 b. [_{CP} who_i [_C do] [_{IP} you want [t_i to kiss you]]]

痕跡を仮定することで、このように移動元の痕跡の位置によって、(19)と(20)はその派生構造であるS構造が異なっていることが表現できる。そして、隣接性条件をS構造に対する条件であるとする、(20b)だけが非文法的になることが、痕跡の存在によって、先に見たようにどのみち必要となる縮約に対する隣接性条件の自然な帰結として説明されることになる。

このように、移動した元の位置に痕跡という目には見えない(発音しない)要素が存在すると仮定することで、それが文の文法性や意味解釈に影響を及ぼすという事実がうまく説明できることになる。

2.1.2 付加移動による痕跡

wh移動以外でも、次の(23)のような話題化変形と呼ばれる、NPを文頭(非A位置であるIP付加の位置)に移動する規則が適用された例も縮約を許さないが、それは、この移動変形も(24)に示すようにwantの目的語の位置に痕跡を残すと仮定すれば、wanna縮約が適用できないことが(25)の例と同じように先の「隣接条件」(18-1)から説明できる。

- (23) a. Those students we want to be successful.
 b. *Those students we wanna be successful.
 (24) [_{IP} Those students_i [_{IP} we want [t_i to be successful]]]
 (25) a. We want those students to be successful.
 b. *We wanna those students be successful.

wh移動も話題化変形も非A位置への移動である(ただし、話題化はIP付加とする)^[4]。そして、このような非A位置への移動が残す痕跡は、どちらも非A位置に移動された要素を論理的演算子として、それに束

縛される変項(bound variable)としての性質を示すことが知られている。従って、これらの痕跡はまとめて非A移動痕跡と呼ぶことができるが、本稿では便宜上こうした非A位置への移動による痕跡を一括してwh痕跡と呼ぶことにする。

このようにS構造で仮定される目に見えない要素もwanna縮約を阻止する例を見てくると、wanna縮約に対する隣接性条件に関与するのは、音形を持つ語彙的要素ばかりでなく、S構造に存在する目に見えない空範疇を含んだすべての統語的要素であるということが可能なように思われる。そこで、(18)のwanna縮約規則に対する隣接性条件(18-1)を次のように修正する。

(26) 隣接性条件:

S構造でwantとtoは隣接していなければならない。

このように修正することで、(26)の隣接性条件は、とりあえず語彙的NPばかりでなく、上で見たようにS構造に仮定される要素である空範疇の一種としてのwh痕跡もその対象とできるようになる^[5]。しかしながら、以下に見るように、実際にはすべての空範疇・痕跡が縮約を阻止するわけではなく、(26)はこのままでは十分なものとは言えない。

2.2 PRO

GB理論で仮定される目に見えない要素としての空範疇には、移動変形によって生じる痕跡以外にも、さらに、移動とは関係なく基底で生成される空範疇PROが存在することが知られている。PROとは、主として不定詞句の主語の位置に「意味上の主語」として現れる音形を持たない名詞句のことである^[6]。

ここで、最初に見たwanna縮約の文をもう一度考察してみよう。

- (6) a. I want to see you.
 b. I wanna see you.

ここで、当然seeの意味上の主語は主節の主語Iであると考えられるから、PROを考慮すると、(6a)の正しい句構造は、実は概略次の(27)のようになる。

- (27) I_i want [_{CPE} [_{IP} PRO_i to see you]].

そうすると、厳密には、PROがwantとtoが連鎖上の隣接性を破っているにもかかわらず、縮約が許されて

いることになる(とりあえず、空のCの位置は無視する)。従って、空範疇であるPROは、先に見た非A移動の痕跡であるwh痕跡とは異なり、隣接性条件に関与せず、wanna縮約を阻止しないと考えねばならないことになる。従って、(26)の隣接性条件に、PROを例外として無視するような付帯条件をつけねばならない。

(28) 隣接性条件:

S構造でwantとtoは隣接していなければならない。

ただし、PROは関与しない。

このように、S構造に存在する空範疇である痕跡とPROのうちでwantとtoの間に介在して縮約を阻止するものが、実はwh痕跡のみであるというのは、上の隣接性条件がそれほど一般性を持つものではないことを示唆し、縮約現象に対する隣接性条件の持つ妥当性に大いに疑いを投げかける。あるいは、隣接性条件は妥当であるとして、PROは何らかの理由でその例外であるとも考えることも可能である。しかし、その場合には、同じ空範疇であるwh痕跡が隣接性条件に関与する以上、空範疇の中に痕跡とPROを区別する原理的な規準が必要であることになる。

さらにまだ、PRO以外にも隣接性条件への例外となる空範疇が存在することが知られている。

2.3 NP痕跡とto縮約

移動による痕跡には、先に見たwh痕跡の他にも、A位置となる主語の位置であるIP指定部への移動であるNP移動(A移動)によって残されるNP痕跡があり、この2つは異なった統語的性質を持つものであることが知られている。そして、このことは縮約現象についてもあてはまる。

2.3.1 wantとNP移動

NP移動構文としては、代表的なものとして、次のような受動文(29)と繰り上げ構文(30)がある^[7]。

(29) a. [_{IP} [_{NPE}] was hit John by Bill]

b. John_i was hit _{t_i} by Bill

(30) a. [_{IP} [_{NPE}] seems [John to be sad]]

b. John_i seems [_{t_i} to be sad]

(29)の受動文では、受動分詞の目的語NPが主語の位置に移動している。(30)の繰り上げ構文では、seemの不定詞補文の主語が主節の主語の位置に移動してい

る。また、次の(31)は不定詞補文をとる動詞believeの補文の主語が、believeが受動分詞になっているために主節の主語の位置に移動したものであり、繰り上げと受動文の合体したものと見なせる。believeが能動形の場合には(32)のようないわゆる「目的語+to不定詞構文」となるものである。

(31) a. [_{IP} [_{NPE}] is believed [John to be a vegetarian]]

b. John_i is believed [_{t_i} to be a vegetarian].

(32) We believe [John to be a vegetarian]

ところで、こうしたNP痕跡と縮約現象の関係についてであるが、実は、不定詞補文をとるwantは(33)のように受動態を許さないし、また繰り上げ動詞でもないで、wantを用いてNP痕跡と縮約の関係を調べることはできないことが知られている(Bresnan 1972, Lightfoot 1977, Lasnik and Uriagereka 1988)。

(33) a. We want John to do it.

b. * John was wanted to do it.

この違いはseemやbelieveの不定詞補文が(34)のようにIPであるのに対して、wantの補文は(35)のように空の補文標識Cを含むCPであるためであり、このCPの存在がNP移動を阻止していることに起因すると考えられる。

(34) a. [_{NPE}] seems [_{IP} John to be genius]

b. We believe [_{IP} John to be a vegetarian]

(35) We want [_{CP} [_{IP} John to do it]]

want補文がCPをとる根拠としては、不定詞補文に語彙的NPが生じる場合に普通は補文標識Cは具現しないが、話者によっては(36)のように補文標識のforを許す者もいるし、(37)のようにwantと不定詞補文の主語の間に何らかの語彙的要素が介入するとforの生起が義務的になるという事実がある。それに対してbelieveなどの受動態を許す動詞ではこういったことは(38)のように一切見られない(cf. Lasnik and Uriagereka (1988: 21), Ouhalla (1994: 109))。

(36) ? We want for John to do it.

(37) a. We want very much for John to do it.

b. * We want very much John to do it.

(38) a. * We believe for John to be a genius.

b. * We believe sincerely for John to be a

genius^[8].

2.3.2 繰り上げ動詞と to 縮約

しかしながら, wanna 縮約と同じような to の V への縮約は, 他のいくつかの動詞にも見られる現象であり, それには次のような場合があることが知られている (Postal & Pullum (1978; 13-14), Jaeggli (1980; 240)).

- (39) a. We used to play cards till after midnight.
 b. We usta play cards till after midnight.
 (40) a. I'm going to visit my aunt.
 b. I'm gonna visit my aunt.
 (41) a. You're supposed to remain in the office.
 b. You're supposta/supsta remain in the office.

そこで, 英語には, wanna 縮約が拡張されたものである「to 縮約規則」(To Contraction Rule) があると仮定できる。そして, この規則も基本的には wanna 縮約と同じ制約に従うといつてよい。そこで, 先に見た wanna 縮約規則 (cf. (18) (28)) を, (42) のような「to 縮約規則」に一般化する。以下, 縮約と言うときには wanna 縮約を含めて to 縮約のことを言う。

(42) To 縮約規則

V... [_I to] → [_V V + to]

- 条件: 1) 「隣接性条件」: S 構造で V と to は隣接していなければならない。ただし, PRO は関与しない。
 2) 「統率条件」: to を主要部とする節が V に統率されていなければならない。(すなわち, V の補部でなければならない)

興味深いことに, これらの to 縮約を受けた文は, 次の (43) が示すようにどれも虚辞の there を主語とできる。また (39) の used to/usta では (44) において見られるように能動-受動で知的意味が変わらないことなどからわかるように, すべて繰り上げ構文として分析すべきである^[9]。

- (43) a. There usta be an old castle around here someplace.
 b. There's gonna be a storm.
 c. There's supposta/supsta be a man on

guard.

- (44) a. Some of those guys usta audit my course.
 b. My course usta be audited by some of those guys.

さらに, (43c) は, (31) と同じく, 次の (45) から派生した繰り上げ受動文であると言える。

- (45) We suppose there to be a man on guard.

従って, これらはすべて NP 移動によって派生されるものであり, (39) (40) (41) や (43) はそれぞれ次の (46) と (47) に示すような S 構造を持つことになる。

- (46) a. We_i used [_{IP} t_i to play cards till after midnight].
 b. I_i'm going [_{IP} t_i to visit my aunt].
 c. You_i're supposed [_{IP} t_i to remain in the office].
 (47) a. There_i used [_{IP} t_i to be an old castle around here someplace].
 b. There_i's going [_{IP} t_i to be a storm].
 c. There_i is supposed [_{IP} t_i to be a man on guard].

そうなる, S 構造で主節の動詞 V と不定詞節 to の間に存在する NP 痕跡が, 縮約をする V と to の隣接性を破っていることになるが, それにもかかわらず, これらの場合には縮約が許されている。すなわち, これらのデータは, wh 痕跡が縮約を阻止するのに対して, NP 痕跡は縮約を阻止しないことを示している^[10]。従って痕跡についても, すべてが縮約を阻止するわけではなく, (28) の隣接性条件の付帯条件に関して (42) の to 縮約規則をさらに次のように修正せねばならない。

(48) To 縮約規則

V... [_I to] → [_V V + to]

- 条件: 1) 「隣接性条件」: S 構造で V と to は隣接していなければならない。ただし, a) PRO と b) NP 痕跡は関与しない。
 2) 「統率条件」: to を主要部とする節が V に統率されていなければならない。(すなわち, V の補部でなければならない)

2.4 wh 移動の中間痕跡 (CP 指定部の痕跡)

以上の考察から、空範疇でも S 構造で縮約を阻止するのは wh 痕跡だけであり、それ以外の NP 痕跡や PRO は隣接性条件にとっては例外的に関与しないことがわかった。ところで、ここで次のような例について考えてみたい (Postal and Pullum 1978)。

- (49) a. Which chickens do you wanna look at?
b. What do you wanna persuade John to buy?

ここでは、GB 理論一般に仮定されているとおり、変形の適用は厳密循環性 (strict cyclicity) に従うものとし、wh 移動はそれぞれの節の CP 指定部を利用した連続循環的適用 (successive cyclic application) に従うと仮定する。そうすると、(49) の文の派生構造 (S 構造) はそれぞれ次のようになると考えられる^[11]。

- (50) a. [_{CP} [Which chickens]_i do [_{IP} you want [_{CP} t_i e [_{IP} PRO to look at t_i]]]]?
b. [_{CP} What_i do [_{IP} you want [_{CP} t_i e [_{IP} PRO to persuade John [_{CP} t_i e [_{IP} PRO to buy t_i]]]]]

この場合、上に見たように縮約が許されるが、縮約の対象となる下線を引いた want と to の間には、(50a-b) に共通して、1 つだけでなくいくつかの空範疇が介在していることになる。その部分をもう少し詳しく見てみると次のようになる。

- (51) ...want [_{CP} t_i e [_{IP}PRO to...]
(a) (b) (c)

ここでは、(a) の wh 中間痕跡、(b) の空の補文標識 C、そして (c) の PRO という 3 つの空範疇が want と to の間に介在している。すでに見たように、PRO と空の C は縮約を阻止しない。そして、wh 痕跡だけが縮約を阻止することを見た。しかし、(49) の例が示すように、同じ wh 痕跡でも (51) での CP 指定部に残った中間痕跡 (a) は縮約を阻止しない。そこで新たに、wh 移動の中間痕跡という別の種類の痕跡を認め、それは縮約を阻止しないとしなければならない。すると、同じ wh 痕跡でも wh 句が基底生成される位置に残った痕跡 (不定詞節の主語の位置に残った wh 痕跡) と、CP 指定部に残された中間痕跡を区別する必要が生じて、(48) の隣接性条件がさらに次のように複雑化する

る^[12]。

- (52) 隣接性条件:
S 構造で want と to は隣接していなければならない。
ただし、a) PRO と b) NP 痕跡と c) wh 移動の中間痕跡は関与しない。

このように、wh 移動の中間痕跡を隣接性条件が無視することが正しいのは、さらに次のような例からもわかる (Postal and Pullum 1978)。

- (53) a. * Who do you wanna be examined by the doctor?
b. Who do you want to be examined by the doctor?

(53) の S 構造は次のようになる。

- (54) [_{CP} Who_i do [_{IP} you want [_{CP} t_i e
(d) (c)
中間痕跡
[_{IP} t_i to be examined t_i by the doctor]]]]
(b) (a)
wh 痕跡 NP 痕跡

(54) で、文頭の who は基底構造では examined の目的語の位置にあり、まずそれが受動化の NP 移動により不定詞節の IP 指定部へ移動する。そのとき残されるのが (a) の NP 痕跡である。次に、wh 移動の連続循環的適用により、who はまず、不定詞節の CP 指定部に移動される、そのときに残されるのが下線を引いた (b) の wh 痕跡である。そこから、最後に補文の CP 指定部から who は (d) の中間痕跡を残して、文頭にある主節の CP 指定部へと移動する。従って、不定詞補文の IP 指定部には (b) の wh 痕跡を、そして補文の CP 指定部にも (d) の wh 中間痕跡を残す。want と to の間の部分は一見すると先ほどの (50) の場合に似ているが、今度の場合には縮約は許されない。そこで、その部分を (55) のように詳しく見て比較すると、それぞれ下線を引いた IP 指定部である不定詞の主語の位置の空範疇の種類が、(51) では PRO、(55) では wh 痕跡と、互いに異なっていることがわかる。

- (55) ... want [_{CP} t_i e [_{IP} t_i to ...]
(d) (c) (b) = wh 痕跡

さて CP 指定部の痕跡は先に (46) で見たように縮約

を阻止しないので、(52a) で wanna が許されないのは、縮約を阻止する補文の IP 指定部に残された wh 痕跡 ((55) で下線を引いた (b) の t_i) があるからということになるが、これは今までの仮定が正しいことを示している。そして、この wh 痕跡の位置は基底構造での who の位置ではないことに注意したい。もともと受動分詞の目的語だったものが NP 移動で移動されたものであるからである。

このように、実は同じ wh 痕跡でも主語や目的語などのいわゆる A 位置に残された wh 痕跡と、CP 指定部に残された wh 痕跡とは縮約に関して、区別されねばならない。このことは痕跡をただ移動の種類によって分類するだけでは不十分であることを示唆しており、隣接性条件に関与する要素の分析をさらに複雑なものとする^[13]。

2.5 まとめ：縮約規則と隣接性条件

以上本節では、まず英語の to 縮約規則は S 構造で適用されて、概略次の「隣接性条件」に従うことを見てきた。

- (26) S 構造で want と to は隣接していなければならない。

ここで、最も単純に考えた場合、S 構造で仮定される統語論的実体のあらゆるものの介在はこの隣接性条件に抵触するというのが、この条件の内容であろうが、空範疇を考慮に入れた場合事実はそれほど単純ではなく、wanna 縮約を中心にして、縮約の隣接条件に関わる空範疇を a) wh 痕跡 (束縛変項となる非 A 位置移動の痕跡も含む)、b) PRO、c) NP 痕跡、d) wh 移動の中間痕跡と 4 つに分けて検討してみると、結局、縮約を阻止するのは、これらの空範疇のうちでも変項となる wh 痕跡だけであるということになる。これをまとめると次のようになる。

- (56) 隣接性条件に関して
- 1) 縮約を阻止する S 構造の要素
 - a. 音形を持つ範疇：音形を持った不定詞節の主語 (語彙的 NP)
 - b. 音形を持たない範疇：不定詞節の主語の位置の wh 痕跡 (変項) のみ
 - 2) 縮約を阻止しない S 構造の要素 (すべて音形を持たない空範疇)^[22]
 - a. PRO

- b. NP 痕跡
- c. CP 指定部に残った wh 移動の中間痕跡

要するに、S 構造に仮定される統語論的実体が隣接性に関与するという前提のもとに仮定した一見簡潔で自然な条件と思える「隣接性条件」(26) も、これらの例外に対処するために、結局 (52) のような付帯条件を必要とすることになってしまった。

- (52) 隣接性条件：
S 構造で want と to は隣接していなければならない。
ただし、a) PRO と b) NP 痕跡と c) wh 移動の中間痕跡は関与しない。

そして、さらに、(56) で示したように、4 つの空範疇のうち 3 つは隣接性に関与せず、隣接性に関与して縮約を阻止するのは、ただ wh 痕跡のみという、例外的なものの方が多いという不自然な事態を引き起こしている。そういう意味では (52) は逆に次のように述べた方が簡潔となる。

- (57) 隣接性条件：
S 構造で want と to は隣接していなければならない。
ただし、語彙的 NP と wh 痕跡 (変項) のみが隣接性に関与する。

しかし、そうしたところで、果たして本当にこの「隣接性条件」が妥当で有意義なものなのか問題であることには変わりがない。要するに、こうした例外の存在は、S 構造に存在する空範疇一般が隣接性に関与し縮約を阻止するという主張が本当に正しいのかということに、すなわち、隣接性条件の一般性、ひいてはその妥当性に対して大きな疑問を投げかけ、さらには、一般に考えられているように痕跡理論を支持する証拠となるどころか、逆に痕跡の設定そのものにも大きな問題を提起することになると言えよう。

また、仮に「隣接性条件」を空範疇などを削除した後に適用される音形部門の条件として、それが有意義なものであるとして、音形を持たない空範疇のうちでどうして A 位置 (主語) の wh 痕跡だけが縮約を阻止するのかに対する原理的な説明が必要となる。

そこで、以下 3 節から 6 節にかけて、この「隣接性条件」に対する GB 理論におけるそのような説明の試

みとして代表的なものを2つ検討し、それぞれ問題点を指摘し、その後で「隣接性条件」を用いない縮約現象の分析を試みることにする。

3. 痕跡と格理論: Jaeggli (1980) の提案

前節では、空範疇が適切に区別されなければ、そのままでは「隣接性条件」は例外が多くて成り立たないということを見た。こうした問題は、元の位置に残った wh 痕跡だけが特別なものである、すなわち他の空範疇とは違った特徴を備えたもので、それが縮約を阻止するということが、原理的に示されれば解決される、とも言える。

それに答えたのが Jaeggli (1980) である。彼は、空範疇と格の関係から、wh 痕跡だけが他の空範疇と性質を異にし、その特性を用いて縮約への隣接性条件を語彙的 NP だけでなく空範疇にまで拡張できることを示した。Jaeggli の提案は概ね次のようなものであり、以下「Jaeggli の一般化」と呼ぶことにする^[14]。

- (58) Jaeggli の一般化:
(S 構造で) 格付与されている要素のみが、縮約を阻止する。

以下、本節では、GB 理論における格理論と、それによってどの痕跡が格付与され、どの痕跡が格付与されないかを検討し、「Jaeggli の一般化」が十分なものかどうかを検討する。

3.1 GB 理論における格理論と空範疇

格理論は、空範疇も含んだ NP の文中の分布を正しく記述することを目的とした GB 理論の下位理論の1つで、概略、1) S 構造における格付与規則と 2) S 構造での格フィルターの2つの装置からなる。まず(抽象的構造)格は次の格付与規則によって S 構造で付与される (cf. Chomsky (1981), Jaeggli (1980: 241))。

- (59) S 構造での統率に基づく格付与規則:
a. 時制辞(定形の Infl) に統率される名詞句には「主格」を付与せよ。
b. (他動詞の) V に統率される名詞句には「目的格」を付与せよ。
c. 前置詞 P に統率される名詞句には「斜格」を付与せよ。

これらの規則に共通して用いられる統語論上の(構造

的)概念に「統率」(government)がある。統率とは、主要部-補部(基本的には動詞とその目的語の関係にあたる)関係を若干拡張したもののだが、ここでは次のような統率の定義に従うことにする (cf. Chomsky (1986a), Chomsky and Lasnik (1993))。

- (60) 統率:
 α が β を m 統御し、かつ α と β の間に障壁 (barrier) が存在しない場合、 α は β を統率する。

次に m 統御 (m-command) の定義をあげる。

- (61) m 統御:
 α が β を支配せず、 α を支配するすべての最大投射が β を支配する場合、 α は β を m 統御する。

m 統御により、統率はその主要部の最大投射内に限られることになる。また、Infl がその指定部となる主語の位置を統率することも可能となる。また、統率は c 統御などとは異なり、無限に下方へ延びて行くことはできないという点で、局所的な関係であるが、それは統率を阻止する障壁となるある種の最大投射が存在するからである^[15]。

例えば、次のような (62) のような構造において、(a) では V が補文の IP 指定部を統率するが、(b) では CP-IP が障壁の働きをして V が補文の IP 指定部を統率することを阻止していると考えられる。

- (62) a. [_{VP} V [_{IP} NP to VP]]
b. [_{VP} V [_{CP}C [_{IP} NP to VP]]]

従って、次のような例外的格付与 (ECM) 構文では不定詞補文の主語は主節の動詞に統率されて目的格を付与されることになる。ここで不定詞の to は、統率子でも格付与子でもない仮定されるので、その主語に主格を付与することはない。

- (63) a. I believe [_{IP} her to be honest].
b. *I believe [_{IP} she to be honest].

それに対して、次のような時制補文は必ず補文標識 that を持つ CP となるので、それが障壁となって主節の V からの統率を阻止するので、主語 NP に目的格が付与されることはない。不定詞の to と違い時制節の Infl は統率子であり、格付与子でもあるので、これが主語 NP に主格を付与する。

- (64) a. *I believe [_{CP} that [_{IP} her is honest]]
 b. I believe [_{CP} that [_{IP} she is honest]]

補文標識 for を持つ不定詞節でも、同じように for が主語に目的格を付与する。

- (65) a. [_{CP} For [_{IP} her to be here]] would be undesirable.
 b. * [_{CP} For [_{IP} she to be here]] would be undesirable.

PROが生じる場合は、Cの位置は空であると仮定する。すると、このPROには格を付与する要素がないことになる。主節の定形Inflは主語の位置のCP全体を統率することはあっても、そのCPが障壁となるのでPROを統率することはできない。

- (66) [_{CP}e [_{IP} PRO to be careful]] would be necessary.

このことは、次のように、(65)とは違って補文標識のforが無い場合には語彙的NPが不定詞節の主語として生起できないことからわかる。(67)ではsheばかりでなく、herでも非文法的となる。

- (67) a. * [_{CP} e [_{IP} Her to be here]] would be undesirable.
 b. * [_{CP} e [_{IP} She to be here]] would be undesirable.

そして(67)を非文法的にしているのが、S構造の表示に次のような対する「格フィルター」(Case Filter)である(cf. Chomsky (1981), Lasnik and Uriagereka (1988))。

- (68) 格フィルター:
 音形を持つNPはすべて(抽象的格によって)格標示されなければならない。

このフィルターは、一般に名詞が格変化を示すことから、形態論上の必要を概念化したものであるとされているが、こうした形態論上の要請としてのフィルターを文法に仮定することは概念的にも自然なものである。例えば次の日本語を考えてみよう。

- (69) a. ボクは太郎にそれをあげた。
 b. *ボク太郎それあげた。

日本語では格がいわゆる「格助詞」(英語の前置詞)に対

応する後置詞)で標示される。(69a)ではそれぞれのNPに格助詞がついているので、格フィルターを満たし文法的であるが、(69b)のようにこの格標示にあたる助詞を省略すると、意味はわかるが、まともな日本語ではなくなる。ただし、絶対に格助詞が省略されないというわけではない。日本語でも一定の条件のもとでの格助詞の省略は可能である。格フィルター分析では、その場合には明示的な格標示、すなわち形態論的格、が無くともそのNPには目に見えない抽象的格が付与されているため格フィルターに違反しないものとされる。ちょうど英語の場合に人称代名詞は主格と目的格で語形が交替するが、普通名詞にはもはや語形の区別はないが、主語の場合と目的語の場合でそれぞれ別の抽象的格が付与されているとするのと同じことである。

そして、この格フィルターは次のようなデータを正しく説明することができる。音形を持つNPがS構造で格を付与されない位置に生起した文は格フィルターにより非文とされる。

- (70) a. *It seems [Susan to be here]
 b. It seems [that Susan is here]
 (71) a. *I am proud [Bill to be here]
 b. I am proud [that Bill is here]

自動詞の seem や形容詞の proud は格付与能力を持たない。非定形Inflである不定詞のtoは定形のInflと異なり主語NPに主格を付与しない(さらに、toは統率子でもないと規定されている)。従って(70a)(71a)の不定詞節の主語の位置にはどこからも格が付与されないで、そこに生起する語彙的NPは格フィルターに抵触して、その文は非文法的になる。それに対して、対応する(b)の文では、時制節の主要部のInflが主語NPに主格を付与できるので、格フィルターに抵触せず文法的とされる。

以上、簡単にGB理論で仮定される格理論について見てきたが、このように、抽象的格に基づいた格理論は、音形を持つNPの分布を正しく規定するのに有効な手段であることがわかるが、次に、前節で見てきた4つの空範疇に関して、格理論がどのようなことを予測するか概観していく。

3.1.1 NP 痕跡

NP移動変形は、格を付与されない位置に生じたNPがS構造での格フィルターを満たすために、格を付与される位置へ移動する。従って、移動の元の位置

である NP 痕跡は格が付与されないものと考えられる。このことは、次のように、NP 痕跡が格付与を必要としない位置に生起可能なことが次の例からわかる。

- (72) a. Susan_i seems [_{IP} *t_i* to be here]
 b. Susan_i is likely [_{IP} *t_i* to solve the problem]

先に述べたように繰り上げ構文の (72) では不定詞節の主語の位置では格が付与されない。語彙的 NP は S 構造でもしこの位置に留まっていると、格フィルター違反になるので、別の格付与位置へ移動する必要がある。つまり、NP 移動は格フィルター違反を逃れるための一手段なのである。移動先の主節の主語の位置は定形 Infl によって主格が付与されるので、(72) は文法的となる。このように、NP 移動は常に格付与を満たすために引き起こされる移動なので、NP 痕跡が生じる元の位置は常に非格位置であると言える。このことはさらに、次のような受動文についても当てはまる。

- (73) a. *It is believed Mary.
 b. Mary_i is believed *t_i*.
 (74) a. *It is believed Mary to be here
 b. Mary_i is believed [*t* to be here]
 c. It is believed [that Mary is here]

受動文では、他動詞も受動分詞となっていて格付与能力が無くなっているので、(73a) (74a) のように目的語 NP は S 構造で動詞の目的語の位置にあると格フィルターに抵触する。そこで (73b) (74b) のように基底で空となっている主語の位置に移動し主格を付与されることになる。(74c) では補文が時制節なので Mary には主格が付与され格フィルターを満たすので、移動する必要はない。

このように、格理論によれば、NP 移動は格フィルターを満たすために NP が格付与されない位置から、格位置へ移動することが説明される。従って、NP 痕跡は必ず格付与されない位置に生起することになる。

3.1.2 wh 痕跡

それに対して、wh 移動は wh 句が C の wh 素性によって CP 指定辞へ移動するものだが、CP 指定辞は格付与されない位置なので、音形を持つ wh 句が格フィルターに違反しないように S 構造で格を持つためには、移動元の痕跡に格付与がなされ、それが移動によって形成される連鎖 $\langle wh_i, \dots, t_i \rangle$ 内で転送されねばならない。

- (75) a. Who_i did you see *t_i*
 b. 連鎖: $\langle who_i, t_i \rangle$
 -case +case

このことは、NP の wh 移動が格付与される位置からのみ可能であることを予測する。そして、これは次のデータが示すように正しい^[16]。

- (76) a. *Who does it seem [*t* to be here]?
 b. *Who are you proud [*t* to be here]?
 c. *Who did Bill try [*t* to be here]?
 d. *Who are you proud *t*?
 e. *Which theory did you understand the proof *t*?
 f. *Who is it believed *t*?

3.1.3 wh 移動の中間痕跡

中間痕跡は CP 指定部にあるが、ここは格位置ではないので、格付与されない。音形を持つ wh 句は移動による連鎖で、wh 句の基底生成の位置に残された wh 痕跡から格を転送されるため、中間痕跡に格は付与される必要はない。また、逆に中間痕跡に別の格が付与されたりすると、2つの格が wh 句に転送されることになり、まずい。

- (77) a. Who_i do you think [*t*' (that) John loves *t_i*]
 b. 連鎖: $\langle who_i, t'_i, t_i \rangle$
 -case -case +case

従って、wh 移動の中間痕跡には格が付与されることはない結論づけられる。

3.1.4 PRO と格

PRO については詳述は避けるが、Chomsky (1981) の LGB の理論では、束縛関係の事実から PRO は代名詞的照応形 (pronominal-anaphor) であり、S 構造あるいは LF (logical form: 論理形式) で適用される束縛理論の予測では、統率範疇を持たない位置、すなわち統率されない位置にしか生起できないとされる。そして、この事実は「PRO 定理」(PRO Theorem) と呼ばれる。

- (78) PRO 定理:
 (S 構造・LF で) PRO は統率されてはならない。

ここで、(語彙)統率されない位置となるのは、時制

を持たない Infl の指定部の位置である、不定詞句、動名詞句の主語の位置である。時制を持つ Infl が統率子として定形節の主語 NP に主格を付与するのに対して、不定詞節の Infl の to (や動名詞節の Infl の -ing) は統率子ではないと規定される。そして、LGB の格理論では (構造) 格は統率を条件として付与されるため、統率されない位置に生起する PRO は必然的に格付与されないことになる。

PRO が格付与を必要としない位置に生起可能なことを示す次の例からもわかる。また、格を必要とする語彙的 NP と相補分布を示すことも、これを支持する。

- (79) a. I am proud [PRO to be here]
 b. *I am proud [that PRO is here]
 (80) a. Bill tried [PRO to be here]
 b. *Bill tried [Mary to be here]
 (81) a. *Bill believed [PRO to be here]
 b. Bill believed [Mary to be here]

3.2 Jaeggli の一般化

以上をまとめると、格理論によれば空範疇は格位置にあるか非格位置にあるかで次のように分類できることになる^[17]。

- (82) a. 格位置の空範疇: 変項としての wh 痕跡
 b. 非格位置の空範疇: a) NP 痕跡
 b) wh 移動の中間痕跡
 c) PRO

ここで、注目したいのは不定詞節の主語の語彙的 NP も格フィルターによって、必ず格(この場合は目的格)を付与されるということである。そして、GB 理論の格理論によれば、空範疇のうちで wh 痕跡を含む変項だけが格付与される位置に生じるという点で特殊であり、格を持つという点では明示的な語彙的 NP と共通していると言える。そこで、Jaeggli はこの共通性を利用して、先述のように、縮約に対する隣接性の条件に関して次のような一般化を提案した。

- (56) Jaeggli の一般化:
 (S 構造で) 格付与されている要素(すなわち、語彙的 NP と wh 痕跡)のみが、縮約を阻止する。

これは要するに、隣接性の条件に関して次のような付帯条件をつけたということに等しい。

- (83) 隣接性条件:
 S 構造で want と to は隣接していなければならない。
 ただし、(S 構造で) 格付与された要素(語彙的 NP と wh 痕跡)のみが関与する。

そして Jaeggli の一般化によれば、2 節で見たきたようなただ例外を列挙するだけの付帯条件とは異なり、まさにこの格を持つ要素、すなわち語彙的 NP と変項である wh 痕跡(非 A 位置移動による痕跡)のみが「隣接性条件」の対象となり、それに対して、格を持たない PRO や NP 痕跡は縮約を阻止しないということが自然に正しくとらえられることになる。そして、この分析はこれまで見てきたデータにうまく一致する。まず、縮約を阻止する例には次のようなものがあったが、これらの下線を引いた要素、語彙的 NP (84)、変項である wh 痕跡 (85) (86) は、どれも格付与される要素であり、(82a) に属するものである。

- (84) a. *I wanna John leave.
 b. I want [_{CP} (for) [_{IP} John to leave]].
 +case
 (85) a. *Who do you wanna kiss you?
 b. Who_i do you want [_{CP} t_i (for)
 -case
 [_{IP} t_i to kiss you]]?
 +case
 (86) a. *Those students, we wanna be successful.
 b. [_{IP} Those students_i [_{IP} we want [_{CP} (for) [_{IP} t_i to be successful]]]
 +case

一方、縮約を阻止しない例では、介在する空範疇は NP 痕跡 (87) (88)、PRO (89)、と wh 移動の中間痕跡と PRO (90) というように、どれも (82b) に属する格を付与されない要素である。

- (87) a. I'm gonna visit my aunt. (=40a)
 b. I_i'm going [_{IP} t_i to visit my aunt]
 -case
 (88) a. There usta be an old castle around here
 someplace. (=43a)

- b. There_i used [_{IP} t_i to be an old castle
- case
around here someplace]
- (89) a. I wanna to see you. (=6b)
b. I_i want [_{CP} (C) [_{IP} PRO_i to see you]]
- case
- (90) a. Who do you wanna persuade to do
that? (cf. 49b)
b. Who_i do you_j want [_{CP} t_i' (C)
- case
[_{IP} PRO_i to persuade t_i to do that]]?
- case

このように格理論に基づいた Jaeggli (1980) の分析では、縮約現象に関して、空範疇は格を付与されるものと、格を付与されないものの2種類に分類できるということを利用して、格を付与される変項としてのwh痕跡のみがwanna縮約を阻止するということ、また、格フィルターの要請から語彙的NPも当然格を持たねばならないことから、「隣接性条件」に関する要素は、格付与された要素のみであるという正しい事実を、すぐれて一般化した形で捉えらえることに成功したのである。そういった意味で、Jaeggliの一般化は、記述的には有意義なものであると言えよう。

4. 形態論的格フィルターの問題: LF可視性条件

このように「Jaeggliの一般化」は縮約の規則に課せられる隣接性条件を正しく、しかも自然に記述することを可能とするが、その説明にはいくつかの問題がある。まず、Jaeggliが前提としている初期のGB理論での格フィルターは、音形を持つNPが格を必要とするという、基本的には形態論上の要請を定式化したものであり、それをwh痕跡(変項)などの空範疇に拡大したものであるが、この格フィルターには、まず、なぜ音形を持つ語彙的NPも含めて、格を付与された要素だけが隣接性条件にとっての介在物となるのか、言い換えれば、空範疇であるA位置のwh痕跡が格によってなぜ可視的になるのかという理論上の問題がある^[18]。

さらに、彼の一般化の前提とされている、格理論、とくにこの形態論的要請としての格フィルターという仮説には次のような経験的問題もある。それは、述部名詞の格をどうするかという問題と、空演算子移動の痕

跡がなぜ格を必要とするのかという問題である。

4.1 述部名詞句と格フィルター

形態論的要請としての格フィルターからすれば、次の例に見られるような述部名詞句も形態論上の要請によらずれば格を必要とするはずである。

- (92) a. John is a gallant man.
b. Bill became a lawyer.
c. Ted remains a bachelor.
- (93) a. We consider John a gallant man.
b. They elected Bill chairman.

しかしながら、(92)のbe動詞やbecome, remainなどは自動詞であり格付与能力を持たないと思われるし、(93)での小節補文の主要部となるような述部名詞句は格位置にない。どうしてこれらの名詞句は格が付与されないまま認可されるのだろうか? こうした例は、上で見た格フィルターの妥当性に疑問を投げかける。

4.2 空演算子移動の痕跡に関する問題

それ以上に重要な問題として、音形を持たない空演算子(empty operator: 以下Op)の移動の痕跡の問題がある。wh痕跡は音形を持たないにもかかわらず、一見格フィルターに従うことは上で見たとおりである。これはCP指定部に移動したwh句が格を必要とするのにCP指定部は格が付与される位置ではないので、移動によって形成される連鎖を通しての痕跡からの格転送が必要となることで説明できた。

しかしながら、ここで関係節の場合を考えてみよう。関係節にはwh疑問文と同様に変項となる痕跡を残すwh移動によるもの(94)と、それに対応するwh句が無い場合、いわゆるthat関係節(95)がある。この場合には音形のない空演算子がCP指定部へ移動したと仮定される。

- (94) a. the man who I see
b. [_{NP} the man [_{CP} who_i C [_{IP} I see t_i]]]
- (95) a. the man (that) I see
b. [_{NP} the man [_{CP} Op_i (that) [_{IP} I see t_i]]]

この移動はwh移動と同じく非A位置への移動であり、後に残る痕跡は束縛変項と解釈される。従って、空演算子の痕跡も格付与される位置にしか残れないこと

を予測するが、次の例からもわかるように、それは正しい。

- (96) a. * The man it seems to be here
 b. * The man you are proud to be here
 c. * The man Bill tried to be here

しかしながら、空演算子の移動の場合には形態論的要請としての格フィルターは効力を持たない。なぜなら、音形を持つ wh 句の移動の場合とは違って、空演算子自体が音形を持たないので格は必要ないからである。では、この場合に空演算子の痕跡に格が要求されるのは、一体どういう理由によるのだろうか？

また、同じような空演算子の移動を含む構文に次のような too-to 不定詞構文がある。これも不定詞節に変項である痕跡が残される。

- (97) a. Mary_i is too clever [Op_i [for us to catch t_i]]
 b. * Mary_i is too reclusive [Op_i [for it to seem t_i to be here]]
 c. * Bill_i is too unpopular [Op_i [for you to try t_i to be here]]

ここで、これらの構文が形態論上の要請としての格フィルターにとって問題となるのは、空演算子移動による痕跡も wh 痕跡同様に、必ず格位置に生起するということである。音形を持つ wh 句の移動では移動先の wh 句が形態論上格を必要とするために、連鎖内の格転送が仮定され、そのためにいわば wh 痕跡が wh 句の代理として格を付与されるという説明が可能であったが、空演算子の場合には、そもそも空演算子自体が音形を持たないので、形態論上格を持つ必要はない。にもかかわらず、その痕跡が格を必要とするというこの事実は、従って、形態論上の要請からは説明できないことになる^[19]。

4.3 可視性条件と PRO

こうした問題は、格フィルターに対するもう一つの考え方によれば、問題とならない。それは、格フィルターを θ 理論の要請によるものであると考える、すなわち、格付与を LF での θ 規準を満たすのに必要となる θ 役割付与のための前提条件とみなすものである (cf. Aoun (1979), Chomsky (1981) 他)^[20]。

- (98) θ 役割付与に関する可視性条件 (Visibility

Condition) :

項(となる名詞句 NP)は、格標示されている場合のみ、(LF での) θ 役割付与に対して可視となる。

すなわち、述部の θ 構造の投射である文のなかで、項である名詞句が認可されるためには、LF でその θ 役割を照合されなければならないが、そのための前提条件として格付与を仮定するものである。この場合には、格を付与されていない項の名詞句は、LF で θ 役割が付与されず、認可されないということになるので、実質上、(98) が先の格フィルターの役割を肩代わりすることになり、格フィルターそのものは独立の条件としては不必要になり、理論全体から見て好ましい結果をもたらす。

ここで、 θ 理論とは、次の「 θ 規準」(Theta Criterion)によって文中における述部が要求する項 (argument) の分布を規制するもので、「投射原理」(Projection Principle) とともに GB 理論で重要な役割を果たすものである。

- (99) θ 規準 :

すべての項は θ 役割を付与されねばならない。

この「可視性条件」(98) は、形態論的要請による格フィルターに対する上でみた問題を解決できる。まず、述部名詞句が音形を持つにもかかわらず格を必要としないのはなぜかという問題に対しては、述部名詞句は θ 標示を必要とする項ではないから格を必要としない、ということになる。また、空演算子の痕跡がなぜ格付与される位置になければならないかについても、空演算子は音形を持たないが、項であることには変わりがないので、 θ 標示を受けるためには LF での可視条件に従って (その連鎖が) 格をもっていなければならないからである、ということになる。要するに、「可視性条件」は LF における条件なので、音形を持つ持たないにかかわらずすべての項 NP に適用され、wh 痕跡や空演算子痕跡も扱えるようになるのである。

さて、このように、形態論的要請による格フィルターと異なり、「可視性条件」は音形を持たない項にも有効なわけだが、そうすると、同じく音形を持たない要素である PRO はどうなるのであろうか。もしも、先にみたように PRO が格を必要とせず、「可視性条件」に従うならば、次のように非 θ 位置にも生起可能なはずだ

が、それは正しくない。というのも一般に PRO は項として θ 役割を標示されねばならないからであり、そのことは次の例が示すように θ 役割を必要としない虚辞と異なり、PRO は、たとえそれが統率されない位置であっても、非 θ 位置には生起できないことからわかる。

- (100) a. I expect [there to be a man on guard]
 b. * I expect [PRO to be a man on guard]
 (101) a. We consider [it to be likely that John will win]
 b. * We consider [PRO to be likely that John will win]

しかしながら、このように修正された「可視性条件」としての格フィルターでは、PRO に対する θ 役割付与は問題となる。何故なら、統率に基づいた格付与のシステムでは、PRO は PRO 定理から統率されない位置にしか生じないために、当然のことながら格は付与されない。しかし、PRO も主語の位置に生じる項の一種であるので当然 θ 役割が与えられなければならない。従って、上記のままの「可視性条件」では、格を持たない PRO は θ 表示されず LF で θ 規準に違反してしまうことになるが、これは事実と合わない。「可視性条件」の一般性を保持するためには、これまでの仮定と異なり、PRO も格を付与されると分析する必要があることになる^[21]。

さらに、この事実は上でみた PRO 定理による PRO の分布の説明も正しくないことを示唆している。そして、さらには、「Jaeggli の一般化」は成立しないことになる。しかしながら、果たして、PRO が格を付与されるということを示す経験的根拠はあるのだろうか。

5. 格理論と PRO 再考: 空格分析

前節で、可視性条件としての格フィルターを仮定した場合、PRO 定理に反して、項である PRO が θ 規準を満たすために、格を付与されねばならないという問題が生じることを見た。もちろん、次ように PRO だけを可視性条件の例外とすることもできる (cf. Chomsky and Lasnik (1993))^[22]。

- (102) θ 役割付与に関する可視性条件 II:
 項 (となる名詞句 NP) は、格標示されている場合にのみ、(LF での) θ 役割付与に対し

て可視となる。ただし PRO は例外とする。

しかしながら、このように PRO を可視性条件の例外とするのは、その理由が特になく限り理論上好ましくない。この問題は PRO が何らかの格を付与されると仮定すれば、このような付帯条項は不要となり、(98) のような簡潔な「可視性条件」が保持できることになる。そこで、Chomsky and Lasnik (1993) は、PRO は非定形の時制辞 Tense (Infl に同じ) によって認可される「空格」(null Case) を持つと仮定し、PRO の認可について、PRO 定理に代わるものとして、次のような提案をしている^[23]。

- (103) PRO の認可条件:
 PRO は「空格」により格標示されねばならない。ただし、「空格」は (ある種の) 非定形の機能範疇である Tense (i.e. Infl) によって認可される。

この分析によれば PRO が非定形の Infl である to と ing を持つ不定詞節、動名詞句の主語に位置にしか生起しない事実が、統率に基づいた PRO 定理を用いずともうまく規定できる。

- (104) a. [_{IP} PRO [_{I'} to VP]] (*to be sick*)
 b. [_{IP} PRO [_{I'} -ING VP]] (*being sick*)

また、次のような例も PRO 定理を用いずとも、空格が付与されていないために非文となるとして説明できる (Lasnik (1993))。

- (105) a. * John admires PRO.
 b. * John believes PRO admires Susan.
 c. * I wonder who PRO admires.
 d. * That PRO admires Susan is obvious.
 (106) a. * John is proud (of) PRO
 b. * That story (of) PRO is rather incredible.

さらに、空格分析の利点はこれだけではない。PRO の分布に関しては、PRO 定理による非統率条件からは説明できない例がある。移動に関して PRO も他の NP と同様に振る舞うことが知られているが、こうした事実も PRO が他の NP 同様に格付与を必要とすると仮定することで、説明できる。

そこでまず、次の例を考えてみよう。

- (107) * We never expected [there to be found

PRO]

この文が非文法的なのは、PRO 定理に従えば、PRO が found に統率される位置にあるからだと言明できる。しかし、同時に found は受動分詞であり格付与能力を持たないから PRO が非格位置にあるからとも言明できる。その証拠に、PRO が to の指定部に移動した次のような文は文法的となる。

- (108) We_i never expected [PRO_i to be
+case
ungoverned
found t]
-case
governed

PRO 定理による分析では、この移動は「統率」を逃れるために生じたとできるが、これは移動に関する「最終手段」(Last Resort) の概念を形態論的特性によるもの他にも構関係の統率によるものまで拡張することを意味し、理論的に問題である(さらに、Chomsky (1993) の仮定する、移動は自らを合法的要素とするためにのみ生じる、という「自己充足 (Greed) の原理」にも反している)。それに対して、空格分析では PRO が to によって空格を付与される位置へ移動するという点で、他の名詞句の移動と同じように、「可視性条件」(98) からこの移動の義務性が説明される。

さらに、次のような例は今見たような PRO 定理の説明が成り立たないことを決定的に示している。

- (109) a. * We want [PRO_i to strike t_i [that the problems are insoluble]].
b. * We want [PRO_i to seem to t_i [that the problems are insoluble]].
- (110) a. * It is rare [PRO_i to strike t_i [that the problems are insoluble]].
b. * It is rare [PRO_i to seem to t_i [that the problems are insoluble]].

これらは、どれも PRO が θ 位置から非 θ 位置に移動した例であり、移動に関する θ 理論の要請は満たしているが、すべて非文である。また、統率される位置から、不定詞節の主語という統率されない位置への移動であり、PRO 定理も満たしている。ここでの PRO の移動後の位置が統率されない位置であることは、次のように移動が関与していない例で PRO が同じ位置に

生起可能なことからわかる。

- (111) a. We want [PRO to solve the problem]
b. (As for John,) it is rare [PRO to be alone]

従って、PRO 定理からはこれら (109) (110) の非文法性は導出できないということになる。だが、空格分析によれば、ここで問題となるのは、PRO が格位置から格位置へ移動していることであるといえるが、従来のように、不定詞節の IP 指定部が格を付与されない位置ならば、すでに見た wh 移動や話題化のように(他に移動を義務付ける要因があれば) 格理論からもこの位置への移動が許されるはずである。しかし、to が空格を付与・照合すると仮定すれば PRO に 2 重の格が付与されて非文になるという説明が可能となる。あるいは、「派生の経済性」によって既に格を付与された NP がさらに格付与のために移動することはできない、言い換えれば移動は格を持たない NP が「可視性条件」を満たすために格付与をされるための「最終手段」であることから、格位置からの移動はできないという理由で非文法的になると説明できる。

要するに、これらの例が許されないのは、次の (112) と (113) の平行関係が示すように、通常の語彙的 NP、PRO にかかわらず、格位置からの移動は許されないという格理論的理由によると考える必要があるのである。

- (112) a. * We want [John_i to strike t_i [that
- θ θ
+case
the problems are insoluble]].
b. * We want [John_i to seem to t_i [that
- θ θ
+case
the problems are insoluble]].
- (113) a. ...[PRO_i to strike t_i [that ...
- θ θ
ungoverned governed
+case +case
b. ...[PRO_i to seem to t_i [that ...
- θ θ
ungoverned governed
+case +case

このように、Chomsky and Lasnik などが提案する

PROの空格分析では、不定詞節のIP指定部に空格を持つPROが存在することになる。しかしながら、ここで、空格も構造格の一種であるとする、wantとtoの間のIP指定部に格を持ったPROが存在することになり、それは「Jaeggliの一般化」からは縮約を阻止することを予測するが、それは次の(114)が示すように明らかに事実と合わず、「Jaeggliの一般化」とは矛盾することになるのである。

- (114) a. I wanna see you. (= (6))
 b. I want [_{CP} e [_{IP} PRO to see you]]
 + 空格

6. PROの生起位置再考: Baltin (1995)の分析

さて、PROに格が付与される必要があるとすると、Jaeggliの一般化を維持する余地は全く無くなってしまふのだろうか？ それに関して、Baltin (1995)が興味深い分析を提案している。最近の分析では、主語NPが基底ではVP内のVP指定部に生成されるとする「VP内主語仮説」が有力であるが、もし他のNPと違ってPROがIP指定部に移動せず、S構造でもVP指定部に留まっていられるとするなら、たとえPROが空格を付与されていたとしても、PROは(115)に示すようにwantとtoの間に介在しないことになり、「Jaeggliの一般化」に従った隣接性条件はそのまま維持できることになる^[24]。

- (115) ... [_{VP} want [_{CP} e [_{IP} [_{I'} to [_{VP} PRO V...]]]]]

一方、Chomskyらのようにtoが指定部-主要部関係でPROの空格を認可・照合するという立場では、たとえばVP内主語仮説をとっても、PROは格照合のためにIP指定部へ移動しなければならないので、こうした説明はできない。

6.1 VP内主語仮説とPROの位置

Baltin (1995)はChomskyらに従って、PROが格を必要とすることは認めるが、その格は次のような語彙的主要部の投射内の指定部の位置で認可されると提案している^[25]。

- (116) [_{XP} PRO X'] where X = V, N, A, P

Baltinは、こうした構造が必要になる根拠をいくつか挙げている。Chomskyらの分析ではPROは非定形

Inflであるtoまたは-ingによつてのみ認可されるとしているが、それでは(117)のような形容詞句APによる二次述語の主語にPROが生じることが説明できない^[26]。

- (117) a. (Very) Angry, we will never succeed.
 b. [_{AP} PRO_i (very) angry]_i, we_i will never succeed.

また、NP内にもPROが必要であることが、(118)の例からもわかる (cf. Chomsky (1986b), Roeper (1987))^[27]。

- (118) a. They_i heard [_{PRO}_{arb} stories about them_i]
 b. *They_i told [_{PRO}_i stories about them_i]

(118b)は、目的語NP内の代名詞themが主語のtheyと同一指示になるという解釈では非文になるが、これはNP指定部に主語theyに制御されるPROを仮定すれば、代名詞のthemが名詞句内でPROに束縛されてしまい束縛原理(B)に違反するというところでうまく説明できる。一方、(118a)ではPROは任意(arbitrary)の解釈である「一般人称」を表し、主語のtheyと別指示となり、themはこのPROと同一指標を持たず束縛原理(B)に違反せず、文法的となる。それが正しいことは、次の(119)のように、(118b)の代名詞themを再帰代名詞のthemselvesという照応形に換えてやると、束縛原理(A)によって文法的な文になることからわかる。仮にNP指定部にPROを仮定しないとすると(118)での差は束縛理論からはまったく説明できなくなる。

- (119) They_i told [_{PRO}_i stories about themselves_i]

また、このPROがDP指定部ではなくNP指定部にあることを示唆する事実もある(Baltin (1995: 230), cf. also Schachter (1976))。DP分析によれば次の(120)のtheも(121)(122)のthisもNP指定部ではなく、DPの主要部となるDの位置に生成される(Abney (1987))。

- (120) [The visiting the relatives] has to stop
 (121) [This [_{VP} PRO hating each other]] must stop

- (122) [This [_{NP} PRO hatred of each other]] is ultimately destructive to both of you.

さて, each other は照応形なので束縛理論によれば, (121) (122) の主語動名詞句内にその先行詞となる項を必要とするはずだが, this のような指示詞は所有格の-'s と異なり DP 指定部を認可しないので, そこに PRO を立てることはできない。だが, NP 指定部は空いているのでそこに PRO があると仮定する。そして Baltin の分析はまさにそのことを予測する。

さらに, PRO が不定詞節の IP 指定部にあるとすると, うまく説明できない事実が遊離数量詞 (Floated Quantifier: 以下 FQ) の分布に関しても見られる。遊離数量詞とは, 次の (123) の諸例にある all のように, それが修飾する名詞句から離れて現れるものを言う。

- (123) a. *The boys all* would have been doing that.
 b. *The boys* would *all* have been doing that.
 c. *The boys* would have *all* been doing that.
 d. *The boys* would have been *all* doing that.

(123) で FQ の all がすべて主語 DP を修飾するという関係をとらえるために, Sportiche (1988) は VP 内主語仮説に従い, FQ が (124b) に示すような基底構造で述部 VP の指定部にある主語 DP に付加された形で [_{DP} [_{QP} all] [_{DP} the boys]] として生成され, この主語 DP が格付与を受けるために順次 VP 指定部を繰り上げて IP 指定部 (e で示してある) まで移動していく際に取り残される位置に FQ が生起するという分析を提案した。QP が最後まで主語 DP に付加したままだと (124a) のようになる。この分析では FQ が動詞・助動詞の左に付加されるという (123) の事実がうまくとらえられている。

- (124) a. [_{DP} All the boys] would have been doing that.
 b. [_{IP} e [_I would] [_{VP} ___ have [_{VP} ___ been [_{VP} [_{DP} all [_{DP} the boys]] [_{V'} doing that]]]]]

さらに, この分析では, 動詞の右側に FQ が生起する次の (125) のような文の非文法性が, 主語 DP がその述

語動詞よりも右に移動することはないことから自動的に説明される (cf. Maling (1976))。

- (125) a. * The boys could have been doing all well.
 b. * The boys could have been doing well all.

ここで, FQ の分布について注意したいことは, 上のような定形節では先の (123a) が示すように FQ が I である法助動詞の直前にも生起可能であるということである。ところが非定形節である不定詞節では事情が異なる。以下のようなデータを考えてみよう。

- (126) a. [To all have been doing that] would have been inconvenient.
 b. [To have all been doing that] would have been inconvenient.
 c. [To have been all doing that] would have been inconvenient.
 (127) * [All to do that] would be inconvenient.

(126) のようにそれぞれ VP 指定部に FQ が生じるのは定形節の場合と等しい。しかし, 非定形節では, (127) が示すように PRO が主語の場合 IP 指定部, すなわち不定詞の to の直前には FQ が生起できないという事実がある。

同じように次の (128) のように主語コントロール動詞構文でも to の直前には FQ が生起できない。一方, (129) が示すように to の右, つまり VP 指定部の位置には FQ は生起できる。

- (128) a. * They tried all to leave
 b. ?*They tried [all to be friendly to us].
 (129) They tried [to all leave].

このような PRO の位置に生じる FQ については Sportiche の分析にとっては問題となる。Sportiche の分析では非定形節でも PRO が IP 指定部に移動するとすれば, それに依存する FQ が to の左に現れても良いことを予測するが, これは事実と合わない。

さらに興味深いことには, (130) のように, 不定詞節の主語が明示的に表された場合や, (131) の繰り上げ構文のように DP 移動によって残された痕跡が IP 指定部にあると考えられる場合には, to の前にも FQ が生起可能となる (Baltin (1995: 234))。

- (130) a. I believe [these people all to have left]
 b. I would prefer [for these people all to leave]
 c. [For these people all to leave] would be convenient.
- (131) a. They seem [all to be friendly to us].
 b. They were likely [all to leave at once].
 c. They were certain [all to leave at once].

これらについては, Sportiche の分析のように主語 DP の移動先位置で FQ が認可されるという説明が成り立つ。

- (132) *They* Infl [_{VP} *t* seem [_{IP} *t* *all* [_{I'} *to* [_{VP} *t* be friendly to us]].

要するに, 不定詞節に見られる語彙的主語のある場合と主語が PRO の場合の違いは, Sportiche の移動分析では, PRO だけが IP 指定部で FQ を認可できないとして, 例外扱いしなければならないことになる。

Baltin は, こうした差は, (133) に示すように, PRO が, 他の主語 DP と異なり, VP 内部に留まり IP 指定部へは移動しないと仮定すればうまく説明できるが, Chomsky たちのように, PRO が [-Tense] Infl の to による空格の照合のために, ちょうど時制節での普通の主語 NP の主格の照合のために移動するのと同じように, VP 内から IP 指定部へ移動するとする分析では説明できないと主張する。

- (133) a. They tried [_{CP} [_{IP} [_{I'} *to* [_{VP} PRO *all* leave]].
 b. * They tried [_{CP} [_{IP} *all* [_{I'} *to* [_{VP} PRO leave]].

さて, Baltin は FQ が, ever などの動詞前修飾語 (preverb) と同じように, その語彙的特性から, 統語的述部 (syntactic predicate) にのみ付加できるとする^[28]。また, ここでいう統語的述部は範疇に内在する (統語的・意味的な) 性質ではなく, 統語上の主語を持つ位置にのみ現れるもので構造的に規定されるものであるとする。そうすると, S 構造でそれを「最小に c 統御する」主語を持たない句は述部としては認可されず, その左に FQ や ever が生起できないことを予測する。主語が明示されない, PRO を持つ to の左に FQ が生起しないのは, 主語となる DP が不定詞節 IP の指定部

に存在しないからだということになる。すなわち, PRO は VP 指定部に留まる。それに対して, 明示的な主語を持つ to-VP の場合は, FQ の生起が可能であることでわかるように, 主語 NP は基底生成された VP 指定部の位置に留まっておらず IP 指定部へと移動される。その結果, I' は述部の資格を得て FQ を認可することになる。

ところで, PRO を持つ不定詞節でも to の直前に FQ の生起が可能となる一見例外的なものとして (134) のような目的語コントロール動詞構文があるが, Baltin の分析では, この場合でも FQ を認可するのは IP 指定部の PRO ではなく, 主節の目的語 DP が PRO のコントローラとして I' となる to-句の主語と解釈され I' に述部の資格を認可するので, FQ が to の左に付加できることになる。そして, この叙述関係は, 概略 (135) に示すように PRO が VP 指定部に留まったままでも, コントローラとなる the men と the two boys が, PRO を含む I' を最小に c 統御するので成立する^[29]。

- (134) a. I persuaded the men [all to resign].
 b. The teacher ordered the two boys [both to pay close attention]
- (135) a. I [_{VP} persuaded [_{DP} the men]_i [_{CP} [_{IP} all [_{I'} *to* [_{VP} PRO_i resign]]]].
 b. The teacher [_{VP} ordered [_{DP} the two boys]_i [_{CP} [_{IP} both [_{I'} *to* [_{VP} PRO_i pay close attention]]]].

この点では, 同じ PRO を持つコントロール構文でも, 先に (128) (133) で見た try のように, 述部を認可する主語となる目的語 DP が無い主語コントロール構文とは異なる。そしてこの分析が正しいことは, 次の (136) のように, 目的語 DP があっても, それが I' に含まれる PRO のコントローラでない主語コントロール構文では to の左に FQ が生起できないことから支持される。

- (136) a. * The men promised me [all to resign]
 b. * The men_i [_{VP} promised [_{DP} me] [_{CP} [_{IP} all to [PRO_i resign]]]]

こうした差は, Sportiche のような分析では PRO に 2 種類の位置を認めねばならず, 結局説明ができないが, Baltin の分析では, (136) では主文の主語が PRO を含む I' を最小には c 統御しないため, コントローラと

なれず、この I' が述部として認可されないため、FQ を付加できないとして説明できる。以上の事実は、Baltin のように、PRO が不定詞 IP の指定部にないとするところ、さらには FQ が移動ではなく叙述関係によって認可されるという仮定のをすることで、はじめてうまく説明がつく。

以上の遊離数量詞の分布から、Baltin は、PRO は S 構造でも IP 指定部に移動せず、VP 指定部に留まり、そこで特殊な空格を認可されるとする分析が正しいと主張する。

6.2 wanna 縮約と PRO

以上のことから、Baltin は、自らが提案するように PRO が VP 指定部に留まっていることが正しいとすると、どちらも格付与されるにもかかわらず、変項である wh 痕跡が縮約を阻止するのに対し、PRO は阻止しないという事実がうまく説明できると、指摘する (Baltin 1995: 244)。

- (137) a. I want PRO to visit Sally.
 b. I wanna visit Sally.
 (138) a. Who_i do you want _{t_i} to visit Sally?
 b. *Who do you wanna visit Sally?

Baltin の分析によれば、これらの文の正しい S 構造は次のようになり、(139) のように PRO は want と to の間に介入しないことになるので、上の文法性の差は、通常の隣接性の条件に還元できることになる。

- (139) I want ([_{CP} e] [_{IP} to [_{VP} PRO [_{V'} visit Sally]]) (∅)
 (140) Who_i do you want ([_{CP} _{t_i} e] [_{IP} _{t_i} to [_{VP} _{t_i} visit Sally]]) (∅)?

さて、PRO の格についてであるが、Baltin は、まず、抽象的構造格を 2 種類に分類する。通常の語彙的 DP に付与される構造格を、形態的に実現される可能性を持つものとして [+actualized] Case とし、さらに、それとは別に、空範疇である PRO には目に見えない格として [-actualized] Case という構造格が付与されると仮定する。この分析によれば、PRO は VP 指定部の位置で [-actualized] Case 認可され、 θ 役割付与に対して可視的となり、PRO は θ 規準を満たす。そして、PRO は音形を持たないので [+actualized] Case を必要とせず、そのために IP 指定部へ移動しなくても、そのまま VP 指定部に留まっていられることにな

る。従って、(139) が示すように、S 構造で want と to の間には何も介入しないこととなり、「隣接性条件」に違反せず、縮約は可能であることが予測される。一方、wh 句は音形を持つ語彙的名詞なので [-actualized] Case の他にも形態論的要請による [+actualized] Case を必要とし、その目的格を付与されるために補文の主語の位置、IP 指定部に移動し、そこで want (あるいは空の補文標識 C) から [+actualized] Case を付与され、その後、さらに最終的に文頭の CP 指定部へ移動しなければならない。従って、こちらの場合は (140) のように、want と to の間の IP 指定部に格付与された wh 痕跡が介入することになって、縮約は阻止されるということが、「隣接性条件」だけで自然に説明できる。このように、Baltin の分析では、Chomsky らの分析のように PRO を IP 指定部 (あるいは AGRsP 指定部) に置く必要を認めないので、PRO が wh 痕跡と同じように格を持ちながら縮約を阻止しないという事実を自然に説明できることになる。そして、このことは、先に指摘した格を持った PRO の隣接性条件への問題を解消し、「Jaeggli の一般化」への例外が無くなり、縮約規則への隣接性条件を付帯条件無しのも最も単純な (98) のままで維持することを可能にする旨の主張をしている。

しかしながら、Baltin の分析は、本稿で見てきた縮約に対する空範疇の影響のすべてについて説明することはできない。それは、Baltin が NP 痕跡と縮約のことを考慮していないからである。そこで NP 痕跡が関与する to 縮約の例が、Baltin の分析でどのように分析されるかを見てみよう。Baltin の分析では、先に見たように遊離数量詞の分布についての考察から、繰り上げ動詞の補文の主語の位置には NP 移動の中間痕跡が残らねばならないとされている。

- (141) They_i I [_{VP} _{t_i} seem [_{IP} _{t_i} [_{I'} all to [_{VP} _{t_i} be friendly to us]]]] (=132)

もしそうだとすると、この IP 指定部にある痕跡(格は付与されない、そもそもこの中間位置への移動がなによって引き起こされるかが不明)は、wh 痕跡の場合同様に縮約を阻止するはずである。が、実際にはすでに 2.3 で見たように、それは正しくない^[30]。

- (142) a. I_i am [_{VP} _{t_i} going [_{IP} _{t_i} to [_{VP} _{t_i} visit my aunt]]]
 b. I'm gonna visit my aunt. (=40)

このように、Baltin の分析は、PRO の問題は解決できても、NP 痕跡が関与する *wanna* 以外の縮約をも含めた *to* 縮約規則については、依然として「隣接性条件」への例外を扱う付帯条件をなくすことはできない。また、同様のことが縮約を阻止しない *wh* 移動の中間痕跡についても言える。

もっとも、*wanna* 縮約だけに限って言えば、Baltin の主張は成り立つ。また、Baltin の分析は、悪くても、隣接性を阻止する PRO 以外の空範疇に関しては「Jaeggli の一般化」を保持することを可能にはする。そういう意味では一歩前進ではある。しかしながら、本稿のように *want* 以外の動詞における縮約現象も単一の規則である *to* 縮約規則の現れであるという前提に立った場合、依然として NP 痕跡や中間痕跡を「隣接性条件」への例外としなければならず、結局のところ、格を持たない空範疇は隣接性条件にとってなぜ見えないのかという、「Jaeggli の一般化」にまつわる根本的疑問には答えておらず、満足のいく分析とは言えない^[31]。

7. *to* 縮約の主要部移動分析

ここまで、縮約に対する「隣接性条件」に関して、それを維持する試み、特になぜ空範疇のうちで *wh* 痕跡のみが隣接性に関与するのかを原理的に説明しようとする試みとして、Jaeggli と Baltin の分析を検討してきた。そして、Jaeggli の格理論に基づく分析は、隣接性に関与する語彙的 NP と *wh* 痕跡がともに格付与される位置に生じる範疇であるという共通点をうまくとらえてはいるが、その分析の前提となる格フィルター概念と、PRO は統率されてはならない、従って格付与されないという考え方に問題があることを指摘した。また、Baltin の分析によれば、格を持つ PRO の問題が解決でき、基本的には「Jaeggli の一般化」を維持することが可能となるが、Baltin の分析でも、なぜ格を持たない空範疇である NP 痕跡や CP 指定部の *wh* 移動の中間痕跡が、その存在にもかかわらず、隣接性に対して見えないように振る舞うのかについては原理的な説明を与えないという、最初に指摘した問題が依然残されていることを指摘した。このように、一見、記述的には正しい一般化をとらえているように思われる「隣接性条件」には、概念的に取り除きたい問題が伴っており、結局のところ、その存在自体に疑問を投げかけざるを得ない。

こうしたジレンマは、*to* 縮約に対する「隣接性条件」そのものを除去することができれば、解決される。本節では、このような「隣接性条件」に依存しない縮約の分析を提案することを試みる。

7.1 VP 削除と *to* の主要部移動: Zagona (1988) の ECP 分析

GB 理論では痕跡を含む空範疇一般の分布を規制する原理として、次のような認可条件としての「空範疇原理」(Empty Category Principle: ECP) を仮定している^[32]。

- (143) 空範疇原理 (ECP):
空範疇 [_{XP}e] は適正統率 (properly govern) されねばならない。

適正統率は、次のように a) θ 統率か b) 先行詞統率のどちらか一方を満たせば良いとされる。そして、 θ 統率は (145) のように定義される (先行詞統率は以下の議論には直接関係がないので、その定義は省略する) (cf. Zagona 1988: 98)。

- (144) 適正統率:
 α が β を適正統率するのは、a) α が β を θ 統率するか、あるいは b) α が β を先行詞統率する場合に限られる。
- (145) θ 統率:
 α が β を θ 統率するのは、 α が β を θ 標示する X^0 であり、 α と β が同位要素 (sister) である場合に限られる。

そして Zagona (1988) は、VP 削除構文に現れる空の VP もこの ECP に規制されるという分析を提案する。その分析によれば、空の VP は時制屈折辞 I (= Infl) に適正統率される場合にのみ認可されることになる。適正統率のためには I は VP を θ 統率しなければならないが、その為には I は語彙化されねばならない。

- (146) 語彙化された (音形を持つ) [+Tense] I は VP を θ 統率する。

音形を持つ I が ECP を満たすことは、まず、次の VP 前置構文からわかる。

- (147) a. They say that John will always write a letter in the kitchen, and [_{VP}I always write a letter in the kitchen] he will *t*.

- b. They hoped that Bill would win the race, and [_{VP}I win the race] he did _t_i indeed.

(148) * They hoped that Bill would win the race, and [_{VP}I won the race] he _t_i indeed.

(147a) のように、VP 痕跡の直前に語彙化された I である法助動詞 will がある場合には文法的である。また (147b) のように、助動詞が無い場合には、時制をになう do が I に挿入されていれば(ここでは, did), VP 痕跡は ECP 違反にならない。しかしながら, (148) のように時制辞が VP 内の動詞に接辞化され I が空となってしまうと, VP 痕跡はこの I に θ 統率されず ECP 違反となり, 非文となる。

同じことが時制文における VP 削除について言える。(149a) の did(n't) や (149b) の has のように, 音形を持つ I がある場合は, それが空の VP を θ 統率するので VP 削除が許される。

- (149) a.A : Did you [finish that problem] ?
 B : No, I didn't [_{VP}e]
 b. John has left and Bill has [_{VP}e] too.

それに対して, 次の (150) のように I が空になると VP を θ 統率しないので, ECP 違反になり, VP 削除は許されない。ここでは I' のような中間投射の削除は仮定しない。

- (150) a.A : Did you [finish that problem] ?
 B : No, I [_{VP}e]
 b.*John has left and Bill [_{VP}e] too.

このように, 時制文における VP 削除現象も ECP によって説明されるが, Zagona はこの分析を非時制節である不定詞節における VP 削除 (いわゆる代不定詞の to の用法) へと拡張する。ただし, 時制節に比べて, 不定詞節では VP 削除の可能性はより制限されている。まず, (151) (152) のように項 (補部・主語) となる不定詞節でしか VP 削除は認可されず, (153) のように付加部の不定詞節内での VP 削除は非文法的となる (cf. also Lobeck (1995))^[33]。

- (151) a. Bill wants to leave, but Mary doesn't want to [e].
 b. John wants Mary to leave, and Bill wants Susan to [e].

(152) We could ask Mary to chair the meeting,

but I believe that [for Bill to [e]] would be disastrous.

- (153) a. *Mary hates to cook, so she buys groceries (in order) for Bill to [e].
 b. *Even though he could jog to [e], Ron doesn't do anything to stay in shape.

Zagona は, その理由を [-Tense] I である不定詞の to は, 音形を持った要素ではあるが, それ自体では VP を θ 統率できないことに求め, to が VP を θ 統率するためには θ 役割転送 (Theta-role transmission) が必要であるとし, その θ 役割転送は主節の動詞による θ 標示 (指示指標の付与) に依存すると考える (cf. Stowell 1981)。一般に, 述語動詞は, その意味から義務的に必要になる要素である項に θ 役割を付与するが, それは通常, 主語と目的語である。一方, 修飾要素である付加部は, 述語動詞にとって義務的な要素ではなく, θ 役割を付与されない。そこで, おおよそ次のような 2 つの仮定をする。

- (154) i) [-Tense] I はそれ自体単独では VP を θ 統率できない。
 ii) V から to への θ 役割転送による θ 統率: θ 標示される項の主要部の to にのみ転送される。

(154) によれば, 付加部の [-Tense] I は θ 役割転送を受けられず, 空の VP を θ 統率できないので, ECP 違反となり, VP 削除は許されないことになり, 上で見た, 項 (主語・目的語の不定詞 (151) (152)) と非項 (付加部の不定詞 (153)) における VP 削除の対照性が説明できることになる。しかしながら, これだけではまだ十分ではない。次に示すように, 項であるはずの主語となる不定詞節では VP 削除が常に可能なわけではなく, (152) と違って不定詞の主語が PRO であるような次の (155) では VP 削除を適用すると非文法的になる。

- (155) a. We could ask Mary to chair the meeting, but I believe that [to do so] would be disastrous.
 b. *We could ask Mary to chair the meeting, but I believe that [to [_{VP}e]] would be disastrous.

それに対して動詞補部となる不定詞節ではこうした差

は現れなかった (cf. (151))。

- (156) a. John wants Bill to leave but Mary
wants [John to _[VP]e].
b. John said I should leave, but I don't
want [to _[VP]e]

主語も目的語と同じように θ 標示される以上、その主要部の to は θ 役割転送により、空の VP を θ 統率できるはずである。従ってこの文法性の差は、別の要因によると考えねばならない。

ここで、興味深いのは PRO を主語とする主語句の不定詞節でも、(157) のように間接疑問文になると VP 削除が許されるという事実である^[34]。

- (157) a. John knows he has to leave, but [when
to [e]] is yet to be decided.
b. John wants to leave, but [when to [e]]
is a big problem to him.

Zagona は、この差を次のように説明しようとする。まず Zwicky (1981) に従い、不定詞の to は文法的機能語であるので、特別の場合を除いては、強勢を受けず、音声的に弱化しなければならず、音韻表示 (以下 PF) において単独では存在できない一種の音韻的接辞であると仮定する。そして、前後にある最寄りの音形を持った要素に一種の接辞化 (cliticization) をしなければならないが、このいわゆる音韻的再構造化 (phonological restructuring) は、次のような条件に従う局所的なものでなければならないとするのである。

- (158) to は PF で再構造化されるために、依存先の要素と同一句内になければならない。

Zagona はこの同一句内の制限を明確に述べていないが、ここでは同一句とは同一投射のことであると考え、そして同一投射内の構造関係には次の3つがあり、ここでは、そのどれかの関係によって再構造化がなされると考える (cf. Chomsky (1994, 1995))。

- (159) i) 主要部-補部関係: IP 内での音形を持つ VP への to の依存
ii) 指定部-主要部関係:
a) IP 内での主語 NP への to の依存
b) CP 内での (C へ主要部移動した) to の wh 句への依存

- iii) 主要部への付加による主要部内関係:
V への to の接辞化による依存

具体的に見てみよう。まず、VP 削除がされず to の補部の VP が音形を持つ場合には、to は常にその右側にある補部の VP に依存できるが、その場合には IP 内で主要部-補部関係が成り立っている。

- (160) a. John wants [_{IP} Mary to [_{VP} leave]]
b. John wants [_{IP} PRO to [_{VP} leave]]

しかし、VP 削除で VP が空になると、to は左の要素に依存せねばならなくなる。そして音形を持った主語 NP が to の左にある場合には、そのまま主語 NP に依存できる。これは IP 内での指定部-主要部関係による。

- (161) a. John wants Bill to leave but Mary
wants John to [_{VP}e].
b. ... Mary wants [_{CP} ϕ for [_{IP} John to [_{VP}e]]]
(162) a. We could ask Mary to chair the meeting,
but I believe that for Bill to [_{VP}e]
would be disastrous.
b. ... but I believe that [_{CP} for [_{IP} Bill to [_{VP}e]] would be disastrous.

しかし、音形を持った主語がない場合、すなわち主語が音形を持たない PRO の場合には、下の (163) でわかるように VP 削除が適用されると to は IP 内のそのままの位置では音韻的再構造化を受けらず、その文は先の接辞化の条件 (158) に違反して PF で非文法的になるはずであるが、(151a) で見たように事実はそうではない。

- (151) a. Bill wants to leave, but Mary doesn't
want to [e].
(163) ... but Mary doesn't want [_{CPE} [_{IP} PRO
to [_{VP}e]]]

(151a) の文法性は、すなわちこの例で to の接辞化が可能になるのは、何故であろうか? そこで、登場するのが主要部移動である。まず、(151a) の文法性を説明する前に、例えば次の (164) のような例を見てみよう。(164) は補部の不定詞節が間接疑問になっている例であり、VP 削除が許されるものである。ここでも (151a) と同じように、主語は PRO なので to はそのま

まの位置で、すなわち IP 内では、この主語に依存することはできない。しかし、CP 指定部に *wh* 句である *when* があるので、(164b) のように *to* が I-to-C 移動をすると仮定すれば、CP 内で指定部—主要部関係により再構造化の条件は満たされる。そして、その際 C は空なので、この主要部移動を阻止するものは何も無い。

- (164) a. John wants to leave, but he doesn't know [when to [e]]
 b. ... know [_{CP} when [_C to_i] [_{IP} PRO [_i t_i] [_{VP}e]]]]

この空の C への主要部移動による VP 削除構文の認可の説明は、先に (157) で見た類似の主語句の間接疑問における VP 削除の文法性も同じように説明する。

先の (151a) に戻ってみよう。この場合には間接疑問の例と違って CP 内にも *to* が依存できる音形を持った要素がない。そこで *to* は C へ主要部移動してからさらに、主節の V へと移動して、*want* に付加されると仮定する。その結果 (165) のような構造となる。そうすれば、付加による主要部内の関係によって *want* と再構造化できるようになる。

- (151) a. Bill wants to leave, but Mary doesn't want to [e].
 (165) ... Mary doesn't [_{VP}[_V want-to_i][_{CP}[_C t_i] [_{IP} PRO [_i t_i] [_{VP}e]]]].

このように、不定詞の主語が PRO である VP 削除構文における *to* の再構造化は、(158) の局所性の制限と主要部移動によって説明される。

次に、主要部移動分析が不定詞内で VP 削除が許されない場合についても説明を与えることを見てみよう。まず、主語句の中でも (155b) では VP 削除は許されなかった。ではなぜこの文では、その左に *that* があるのに *to* の再構造化が許されないのだろうか。

- (155) b. * We could ask Mary to chair the meeting, but I believe that [to [_{VP}e]] would be disastrous.

Zagona はこれを次のように説明する。まず、主要部移動の痕跡も、句 (最大投射) の移動の場合と同じく、ECP に従うので、その場合、主要部の痕跡は先行詞統率されねばならない(付加部と同じ)。また、一般に統率は障壁によって阻止されるが、主語句と付加部句は

L 標示されないの、障壁となる。従って、*to* は主要部移動によって主語句や付加部句から外へは出られないことになる。すなわち、主要部移動についても、Huang (1982) のいう「抽出領域条件」(Condition on the Extracted Domain: CED) 効果が見られるわけである (cf. also Baker (1988))。CED は、適正統率されない句からの要素の抽出は禁止されるというものであり、次のようないわゆる「付加部条件」(166) や「主語条件」(167) を包含するものである。

- (166) a. * Which book did you go to college [without reading t]
 b. * To whom did they leave [before speaking t]
 (167) a. * What did [your interest in t] surprised John?
 b. * The hat [which [that I bought t]] seemed strange to her was a fedora.

上でみた (164) のような間接疑問文の場合は、IP が障壁ではないので *to* の移動は ECP 違反にならず、*to* は I から C へ移動でき、主語句の CP 内で再構造化できるので、文法的となった。それに対して、VP 削除が許されなかった (155b) はどうであろうか。*to* は音韻的再構造化のために主要部移動によって補文標識 *that* に接辞化しなければならないが、そうすると、次の (168) のような構造を派生することになる。

- (168) *... [_{CP} that-t_i [_{IP}[_{CP} [_C *t'_i] [_{IP} PRO bar. [_i t_i] [_{VP}e]]]] would be disastrous

(168) で *to* はまず主語句内の C へ主要部移動するが、先に見たようにこの移動による痕跡 *t_i* は ECP を満足している。ここで、再構造化のために、*to* はさらに上の補文標識 *that* まで移動しなければならないが、今度は、主語句の CP は L 標示されないの障壁となり、下線を引いた、その痕跡 **t'_i* が先行詞統率されず、この移動は ECP 違反となる。要するに、(168) が非文法的であるのは、主語句の中から *to* を取り出したがためであり、これは上で見た CED 効果と同じものである。そして、*to* の音韻的再構造化が、一般に移動変形への制約とされる CED 効果を示すことは、この現象が移動によるものであることを、強く示唆していると考えられる^[35]。

さらに、Zagona によれば、別の現象からも VP 削除構文に義務的な *to* の主要部移動が関係していること

を示す証拠があるという。一般に主要部移動は次に挙げる「主要部移動制約」(Head Movement Constraint: HMC) に従うとされる (cf. Travis (1984), Baker (1988), Rizzi (1990))。

(169) 主要部移動制約 HMC:

主要部 X^0 は、 X^0 を適正統率する主要部 Y^0 へのみ移動することができる。

この制約は、概略、主要部はすぐ上の主要部の位置へしか移動できず、それを飛び越して、さらに上の主要部の位置への移動は禁止されるというもので、基本的には次のような例を説明するのに必要となる。

- (170) a. Will_i John t_i have finished the work by tomorrow?
b. *Have_i John will t_i finished the work by tomorrow?

英語の疑問文などでは、主文で主語—助動詞の倒置が見られるが、それは I から C への主要部移動であると分析できる。しかし、助動詞が複数個並んだ場合には、最上位の I の位置にある助動詞だけが C へ移動でき、VP 内にある have などが I を飛び越して C へ移動することは許されない。そして、(170) のようにこうした移動が許されないのは上の HMC による。ただし、VP 内に基底生成された have も概略 (171) に示すように I の位置が空である場合には、そこに一度移動されてからなら、さらに C まで HMC に違反することなく移動できる (連続循環的適用)。

- (171) a. Has John finished the work yet?
b. [_{CP} [_Ce] [_{IP} John [_Ie] [_{VP} have [_{VP} finished the work] yet]]?
c. [_{CP} [_C have+I]_i [_{IP} John [_I t_i] [_{VP} t_i [_{VP} finished the work] yet]]?

さて、Zagona は to の移動が HMC に従うことを示す例として、不定詞の主語句が wh 移動したときにはその不定詞節では VP 削除が許されないという事実を挙げて (cf. also Lobeck 1995)。

- (172) The public wanted Shultz to resign;
a. Who do you want to resign?
b. *Who do you want to [_{VP}e]?

まず、(172b) の VP 削除を受けた to 不定詞節は want の補部なので、 θ 役割転送については問題はな

く、to は空の VP を θ 統率できるはずである。しかし、これ以外にも to は先に述べた音韻論上の理由で義務的に want に依存しなければならない。そしてそのためには、to は (173b) に示すように主節の want まで主要部移動していかねばならない。

- (173) a. *Who_i do you want [t_i to [_{VP}e]]?
b. *Who_i do you want-to_j [_{CP} t_i [_C ϕ_{for}] [_{IP} t_i [_I t_j] [_{VP}e]]?

さて、この文は wh 疑問文であり、不定詞節の主語の位置には wh 痕跡 t_i が残されている。そして、この wh 句は項なので、格フィルター (可視性条件) を満たすために、その wh 痕跡が格付与されねばならなかった。その格を付与するのは C であった。そこで、ここでは、C の位置に音形を持たない空の for (以下 ϕ_{for} で示す) が存在すると仮定する。そうすると、この C の位置は空ではないので、そこへ to を移動することはできないことになる。また、to が C を飛び越えて、一気に主節の V の want まで移動することは、HMC により禁じられるので、結局 to が音韻的に再構造化されず、(173b) での VP 削除の非文法性が説明される。この説明は to が主要部移動をすると仮定することで、はじめて成立することに注意したい。そして、その場合、(173b) の非文法性は、究極的には格付与素性を持つ C が、to の want への主要部移動を途中で阻止していることが原因であることになる^[36]。それに対して、VP 削除が適用されていない (173a) の方は、同じ wh 疑問文でも VP が音形を持つために、先述のように to はその場でこの VP に再構造化でき、to が移動する必要がなく、非文法性は生じないということになる。

ここでもう一度、(151a) (156b) のような wh 疑問文ではない、PRO を持った不定詞補文での VP 削除を考えてみると、PRO は C から格を付与される必要はないので、(174b) に示すように C には格素性を持った空の for は存在せず [_Ce] で、主要部移動の着地点になれる。従って、その空の C を利用して、to はさらに主節の V へと連続循環的に移動していくことができるので、HMC 違反を引き起こさず、VP 削除は文法的になるのである。

- (174) a. I want to resign, and Bill wants to [_{VP}e] too
b. I want to resign, and Bill wants [_{CP} [_Ce] [_{IP} PRO to [_{VP}e]]] too

- c. I want to resign, and Bill wants-to_j [_{CP} _{t_i} [_{IP} PRO _{t_j} [_{VP}e]]] too

このように不定詞節における VP 削除の文法性が、CED や HMC に従うという事実は、不定詞の to の主要部移動を仮定してはじめてうまく説明されることであり、同時に不定詞の to が音韻的再構造化を受けるために移動するという仮説を支持する、強い証拠になると考えられる。

さて、本節では Zagona の分析に従って、PRO が IP 指定部に基底生成されるという前提で分析をしてきた。この前提は先に見た PRO の位置に関して、to が IP 指定部で PRO の空格を認可するとする Chomsky を代表とする一般的な立場と同じであるが、PRO が VP 指定部に留まるという Baltin (1995) の分析を採用しても同じように成り立つことを、縮約現象の分析に移る前に見ておく。Baltin の分析によれば、VP 削除を許さない不定詞の主語が wh 移動された例と、VP 削除を許す PRO を持つ不定詞節の構造は、それぞれ次のようになる（ここでは暫定的に V' が削除されると考えておく）。

- (175) a. * Who_i do you want [_{CP} _{t_i} [_C ϕ_{for}] [_{IP} _{t_j} [_{I'} to [_{VP} _{t_j} [_{V'}e]]]]]?
 b. * Who_i do you want-to_j [_{CP} _{t_i} [_C ϕ_{for}] [_{IP} _{t_j} [_{I'} [_I _{t_j}] [_{VP} _{t_j} [_{V'}e]]]]]?
 (176) a. I want to resign, and Bill wants [_{CP} [_Ce] [_{IP} to [_{VP} PRO [_{V'}e]]]] too
 b. Bill wants-to_j [_{CP} [_C _{t_i}] [_{IP} [_I _{t_j}] [_{VP}PRO [_{V'}e]]]] too

Baltin の分析では、(175) で wh 移動を受ける不定詞の主語 DP は基底で VP 指定部に生成され、[+actualized] Case を C にある空の for から付与されるために、IP 指定部に移動してから、最終的に主節の CP 指定部へ移動する。そしてこの C にある空の for が to の want への主要部移動を阻止するために、(175) は非文法的となるのである。一方、VP 削除が許される (176) の方では、語彙範疇の V が VP 指定部で PRO の [-actualized] Case を認可するので PRO は VP 指定部に留まるが、PRO は音形を持たないので to は、やはり主節の V まで主要部移動しなければならないが、C が格素性を持つ必要はなく、上でみた分析と同じくこの [C]e が主要部移動の連続適用を阻止しないために、正しく文法的であることが説明できる。要する

に、to の主要部移動の可能性に関しては PRO の生起位置は関係ないのである。後述のように、縮約現象に関しても同じことが言える。

7.2 to 縮約と主要部移動

Zagana (1988) はこうした VP 削除に関する事実が、先にも見た次のような wanna 縮約の例と共通性を持つことを指摘する。すなわち、不定詞の主語 NP が wh 移動を受けると wanna 縮約ができなくなるという事実である (cf. (20))。

- (177) a. * Who do you wanna visit you?
 b. Who do you want to visit you?

「隣接性条件」のもとでは、(177a) の非文法性は、次のように格付与される wh 痕跡が縮約を阻止すると、説明されてきた。

- (178) Who_i do you want [_{t_i} to visit you]?
 + case

さて、ここで wanna 縮約を、上と同じように to が主要部移動により主節の want まで移動してできた want-to に、PF で音声弱化が起こり wanna になると仮定しよう^[37]。そしてこの、wh 痕跡がこの縮約を阻止する例を、そうした観点から再び考えてみると、先の VP 削除の場合と同じことが言えることがわかる。(177a-b) の派生構造はそれぞれ次の (179) (180) のようになる。

- (179) * Who_i do you want-to_j [_{CP} _{t_i} [_C ϕ_{for}] [_{IP} _{t_j} [_{I'} [_I _{t_j}] [_{VP} visit you]]]]]?
 (180) Who_i do you want [_{CP} _{t_i} [_C ϕ_{for}] [_{IP} _{t_j} [_{I'} to [_{VP} visit you]]]]]?

縮約の適用によって非文法的となる (179) では、to が主節の want まで移動しなければならないが、途中の C にある空の for、 ϕ_{for} がその移動を阻止していて、I に残された _{t_i} が HMC に違反している。一方、文法的である縮約をしない (177b) は (180) のように to は I の位置で右の VP に依存できるので、主要部移動する必要はなく、何の条件にも違反していないことがわかる。要するに、この to の主要部移動による分析では、縮約を阻止するのは格付与された wh 痕跡ではなく、to の V への移動をその間で阻止する格付与をする C の存在ということになる。

そう考えれば、PRO の存在は、それが統率されない位置で格を持たないとしても、あるいは、空格を持つとしても、どちらにしろ to の V への移動を阻止することにはならない。さらには、VP 削除に関して見たのと同じように、(181) のように Baltin に従って PRO が VP 指定辞の位置に留まっていようが、(182) のように Chomsky, Lasnik, Watanabe などが仮定するように拡大投射原理 (EPP) と空格の認可条件 (103) のために PRO が IP 指定辞に移動していようが関係ない。Chomsky らの立場でも PRO の空格は非定形の Infl である to (の痕跡) によって認可されるのだから、C は空のままで、to の主要部移動を阻止しないと、考えられるからである。

(6) I wanna see you.

- (181) a. I want [_{CP} [c_E] [_{IP} [_{I'} to [_{VP} PRO see you]]]]
 b. I want-*t*_i [_{CP} [c *t*_i] [_{IP} [_{I'} [_i *t*_i] [_{VP} PRO see you]]]]
 (182) a. I want [_{CP} [c_E] [_{IP} PRO_j [_{I'} to [_{VP} *t*_j see you]]]]
 b. I want-*t*_i [_{CP} [c *t*_i] [_{IP} PRO_j [_{I'} [_i *t*_i] [_{VP} *t*_j see you]]]]]

さて、この主要部移動による分析では、NP 痕跡が to 縮約を許すという事実はどうのように分析されるのだろうか。(183) に示すように、繰り上げ構文での補文は want の場合と違って、CP ではなく IP である。そうすると、縮約を起こす場合、不定詞の to はすぐ上の、その不定詞節 IP を統率する、すなわち補部にとる、V へと主要部移動することになるが、この場合には主要部移動は一気に行われることになるので HMC は働かないのは明かである。従って、to は自由に V に接辞化され、音声弱化を受けられる、すなわち縮約されることになる。

- (183) a. John *usta* to play cards till midnight.
 b. John_i [_{VP} *usted* [_{IP} *t*_i [_i to] play cards till midnight].
 c. John_i [_{VP} [_V *usted-t*_o] [_{IP} *t*_i [_i *t*_j] play cards till midnight].

また、wh 移動の中間痕跡に関しても、CP 指定部の要素は主要部移動には関与しないので、その存在とは無関係に、(184) のように補文の主語が PRO である場合には C は空なので縮約は許され、一方 (185) のよう

に補文に明示的な主語がある場合には格付与素性を持つ C の ϕ_{for} が to の want への主要部移動を途中で阻止するので、縮約は許されない、ということが正しく説明される。

- (184) a. Who do you wanna visit *t*?
 b. [_{CP} Who_i do [_{IP} you want [_{CP} *t*_i [c_E] [_{IP} PRO to visit *t*_j]]]]?
 c. [_{CP} Who_i do [_{IP} you want-*t*_o] [_{CP} *t*_i [c *t*_j] [_{IP} PRO *t*_j visit *t*_j]]]]?
 (185) a. *Who do you wanna John to visit *t*?
 b. [_{CP} Who_i do [_{IP} you want [_{CP} *t*_i [c ϕ_{for}] [_{IP} John to visit *t*_j]]]]?
 c. *[[_{CP} Who_i do [_{IP} you want-*t*_o] [_{CP} *t*_i [c ϕ_{for}] [_{IP} John *t*_j visit *t*_j]]]]?

最後に、語彙的 NP が want の補文の主語になる場合を考えよう。この NP も格フィルターに従うので、この位置で格付与されねばならない。この場合も、wh 疑問文の時と同様に、C は格付与子となる for か ϕ_{for} ということになる。従って C は空ではなく、どちらの場合も、wh 痕跡のところのみたのと同様に、C へ to を移動することはできない。従って、want への to の接辞化は許されず縮約は阻止されることになる。

- (186) a. *I wanna John leave.
 b. I want (for) John to leave.
 c. I [_{CP} [c ϕ_{for}] [_{IP} John to leave]]]
 d. *I want-*t*_o [_{CP} [c ϕ_{for}] [_{IP} John [_i *t*_j] leave]]]

ここで、注意したいのは、今見た語彙的 NP が縮約を阻止するのが、ここでの主要部移動分析では、want と to の間の「隣接性条件」の違反によって (186a) が非文法的になるのではないということである。

このように、主要部移動による to 縮約の分析をとれば、縮約に関する「隣接性条件」は不要であることになり、痕跡の区別も不要となる。そして、「Jaeggli の一般化」によって記述されていた縮約現象に見られる文法性の差は、移動変形に対するより一般的な原理によって説明できることになる。さらに、この分析では、最初に見た「統率条件」も独立したものとして仮定する必要はなくなることに注目したい。この条件は、ここでの主要部移動分析では、to がそれを統率しない V へ移動することはできないという条件に言い換えられる

が、このことは、すでに VP 削除のところで見たように、主要部移動の痕跡に課せられる一般原理 ECP によって説明される (cf. Baker (1988) の編入 (incorporation) 理論)。

結局、このように考えると 2 節で仮定したような「to 縮約」という独立した規則は存在しないことになる。また、それに伴って、縮約規則の適用条件であった、「隣接性条件」と「統率条件」も不要であることになるが、それらが説明した事実は、移動変形一般に対する普遍文法 (UG) の一般原理によって肩代わりされることになるのである。

しかし、そうすると、最近の極小主義の研究が示しているように、この移動も、主節の動詞の形態論的特性 (morphological features) から説明されねばならず、状況さえ許されれば want to と wanna の交替が自由であることが示すように、to の移動が随意的に適用されるとしておくのでは、まだ不十分である。できれば、wanna での主要部移動が何らかの形態論的特性によって引き起こされるとする分析が望ましい。さらに、Zagona のように to そのものを移動する分析には、次にみるような経験的問題もある。そこで次節では、Zagona の分析を若干修正し、それらの問題を解決できるような主要部移動による分析を提案したい。

7.3 空の to の移動

まず、次のような付加疑問文での VP 削除を考えてみよう。付加疑問の部分では I-to-C 移動によって文頭に I の位置に生成される助動詞が移動しているので、I が空になっているにもかかわらず VP 削除は許される (Zagona 1988: 99)。

- (187) a. Mary won't leave tomorrow, will she?
b. ... [CP [C will_I] [IP she [I t_I] [VP e]]]

Zagona はこうした例を説明するために、I の痕跡は、音形を持つ I 同様に、VP 削除を認可できるとしている。そうすると、上でみたように wanna 縮約が to の主要部移動によるとすると、残された to 移動の痕跡も VP 削除を認可できるはずである。しかしながら、(188) に見るように、want to の場合とは異なり、wanna は VP 削除を認可しない。

- (188) a. John wants to leave and I want to
[VP e] too.
b. * John is leaving and I wanna [e] too.

Zagona の分析では、(188) の want to の場合も義務的な音韻的接辞化のために to は主節の V まで移動しているはずである。そうすると、ここでは、上の仮定によりその痕跡が VP 削除を認可できることになる。そこまではよいが、ではなぜ (188b) のように wanna となると VP 削除ができないのだろうか? このことは上の to の主要部移動分析では説明できない^[38]。

興味深いことに、VP 削除を認可できないのは wanna の場合だけではない。次のような助動詞縮約でも VP 削除は認可されない。

- (189) a. John has left and Bill has [VP e] too.
b. Bill's left.
c. * Bill's [e] too.

Zagona によれば、空の VP の認可には、ECP により、少なくとも語彙化された I が必要であった。そしてそれは痕跡でもよい。それに対し、助動詞縮約の場合は、I-to-C 移動とは異なり、移動は関与せず空の I, [e] が存在し、それは VP 削除を認可できないとすれば、(189c) の非文法性が説明されることになる^[39]。

- (190) * [IP Bill's [I' [I e_I] [VP t_I [VP e]]]]

さて、このように空の I [e] が VP 削除を認可できないという点に、注目して、ここでは to 縮約では to が移動するのではなく、上の (184) での [+Tense] の空の I に対応する、[-Tense] の空の I である「空の to」、すなわち ϕ_o が、want ではなく、基底で wanna のまま生成される主節の V の位置まで、主要部移動すると仮定しよう。そうすると、不定詞の場合についても上と同じ説明が成り立つことになる。まず、(191) のような VP 削除を許す場合の to 移動では、to 自体が VP 削除に対する θ 統率の条件を満たして。そして、不定詞節に語彙的な主語がある場合には to は移動しなくてもよく、to は I の位置で空の VP を認可できる。従って次の (191) は正しく文法的であることが予測される。

- (191) a. ... but I want John to [e]
b. want [CP [C ϕ_{for}] [IP John [I' [I to] [VP e]]]

また、(192) のように主語が PRO の場合には、VP 削除が適用されると to は主要部移動によって主節の V まで移動するが、先の付加疑問文の場合と同じように、

I の位置に残された to の痕跡が空の VP を認可できる。

- (192) a. ... and I want to [e]
 b. want [CP [c e] [IP PRO [I' [I to]] [VP e]]]
 c. want-to_I [CP [c t_I] [IP PRO [I' [I t_I]] [VP e]]]

さて, wanna の場合にはどうなるか。この場合には (193) に示すように, 縮約のための主要部移動により, 空の VP の前には空の to である ϕ_{to} の痕跡が残るが, もともと空の VP を認可できない要素の ϕ_{to} の痕跡も, 当然空の VP を認可できないと仮定すれば, この場合には VP 削除ができないことがうまく説明できることになる。

- (193) a. wanna [CP [c e] [IP PRO [I' [I ϕ_{to}]] [VP e]]]
 b. *wanna- ϕ_{toI} [CP [c t_I] [IP PRO [I' [I t_I]] [VP e]]]

そして, このように to 縮約が空の to の移動によると考えると, それが音韻的再構造化での to 移動とは別の規則であり, なぜ wanna, usta などの場合には移動が義務的に適用されねばならないか説明することが可能になる。すなわち, 空の to, ϕ_{to} は 1 種の統語的接辞であり, wanna や usta という縮約形に接辞化することではじめて認可される要素なのである。そして, それ故に移動が義務的なのである。このことは, 次のような文の非文法性を wanna とは違い want は ϕ_{to} を認可しないということから説明することを可能にする。

- (194) a. *I want go.
 b. *I want [CP e [IP PRO [I ϕ_{to}]] [VP go]]]

こうすることによって, to の移動の義務的適用が, wanna と空の to の形態論的性質から導き出されることになる^[40]。

8. 結 び

以上, 本稿では, 英語に見られる wanna 縮約を代表とする to 縮約現象の分析について考察してきたわけだが, 結論としては縮約現象に関しては, 従来の提案のように 1 節および 2 節で見たような独立した to 縮約規則は存在せず, 動詞の縮約形が用いられる場合, も

ともと辞書に登録された縮約形が基底生成され, その縮約形によって選択される補部の不定詞句には一種の接辞であると考えられる空の非定形屈折辞 ϕ_o が選択され, それが主要部移動によって主節の縮約形動詞まで移動し, 互いを認可し合うという, 主要部移動分析が好ましいことを Zagona (1988) の分析を元にして提案した。この分析の利点としては, to 縮約規則の例外事実を扱うのに必要となる 2 つの条件である「隣接性条件」と「統率条件」が, 主要部移動分析を採用することによって, UG の原理であるとされる移動に対する一般的原理から説明可能となることが, まず挙げられる。とりわけ「隣接性条件」については, Jaeggli (1980) による分析でも, Baltin (1995) でも部分的にしか解決できない問題が残る, その存在自体が怪しいことを指摘したが, それも主要部移動分析では, そもそもそのような条件自体が不必要なので問題とならない。

また, Zagona (1988) の to の主要部移動分析にも, 問題があることを指摘し, 先に述べたように to そのものではなく, 接辞としての ϕ_{to} が主要部移動をするという分析に修正を試みた。この方が好ましいのは, 本論では触れなかったが, 縮約現象が一部の動詞に限られる, すなわち, 縮約は語彙的特殊性を示すという周知の事実からも, 支持される。また, この分析は, 最近の極小主義での主張である, 文法操作, 特に移動変形には随意的な操作は無く, 経済性の原理に従った最終手段として, すべて何らかの形態論的特徴に依存して義務的に適用されるべきであるという考え方にも一致することを見た。

ここで, 1 つ残った問題について考察する。隣接性の条件によって wanna 縮約を阻止するのは, 実は want の不定詞補文の主語となる語彙的 NP だけではない。次のように, 副詞要素が want と to の間に介在した場合にも, wanna 縮約が阻止されることが知られている^[41]。

- (195) a. I want very much to go to the game this evening.
 b. ?*I wanna very much go to the game this evening.
 (196) a. I want badly to be good.
 b. ?*I wanna badly be good.

我々の提案した空の to の主要部移動による分析では,

こうした副詞要素は、補文標識とは無関係であり、従って to の主要部移動を阻止しないので、縮約は許されることを予測するので一見問題となりそうである^[42]。しかし、Postal and Pullum (1978: 27) によれば、すべての話者がこのような文を非文とするのではなく、話者によっては (189b) (190b) を完全に文法的であるとする者(例えば、T. Langendoen)もあり、方言差がみられることも知られている。従って、こうした例を許容する話者の文法では wanna 縮約はすべて主要部移動の制約に従うが、認めない話者には、これとは別に、PF での音韻的接辞化に関する to の移動に対して「音形を持つ要素を越えることはできない」という旨の、独立した隣接性条件が余分に働いていると考えることができる。ただし、この制約は先に 1 節、2 節で見たものとは違い、音形を持たない空範疇は全く対象にしないと考えられる。こうした制約を持つ文法を内在する話者も上で見てきた wh 移動に関する縮約のデータに関しては同じ判断をするので、この音韻的隣接性条件に関しては、従来のように wh 痕跡だけを特別に扱わねばならないという問題は生じない。こうした音韻上の制約を仮定することは、それほど不自然なことではないであろう^[43]。以上のように、主要部移動による縮約現象の説明は、空範疇に関する問題を取り除き、さらには方言差も独立した制約の有無によりうまく説明できるという点で優れている、また他にも様々な点で従来の分析よりも優れていると結論できる。

註

- [1] このように統語範疇が関与することは、この縮約規則が単なる音声的現象ではなく、統語上の規則であることを示唆している。他の音声的弱化現象との比較については、Andrews (1978), Selkirk (1984), Kaisse (1985) などを参照。Chomsky and Lasnik (1977, 1978), Aoun and Lightfoot (1984) などは、この規則を to 接辞化規則 (to cliticization) と呼んでいる。実際には統語部門で (S 構造で) to が V に接辞化した後に、音韻部門で音声弱化規則が適用されるという、2 段階の過程があることになる。
- [2] 統率の定義については後述。また、この問題について、詳しくは Pullum and Postal (1982), Aoun and Lightfoot (1984) の議論を参照。

[3] Aoun and Lightfoot (1984: 406) によれば、さらに次のような等位構造制約に従う場合も、統率条件で扱えるとされている。

- (i) a. I want to dance and to sing.
b. *I wanna dance and to sing.
c. I want [_{CP} [_{CPE} [_{IP} PRO to dance]]] and [_{CPE} [_{IP} PRO to sing]]].
- (ii) a. I don't need or want to hear about it.
b. *I don't need or wanna hear about it.
c. I don't [_V [_V need] or [_V want]] to hear about it.

ただし、次のように動詞句 VP または動詞 V が等位接続される場合には、want が to を統率できるので、縮約が許される。

- (iii) a. I wanna dance merrily and sing to my heart's content tonight.
b. I want [to [_{VP} [_{VP} dance merrily] and [_{VP} sing to my heart's content]]] tonight.
- (iv) a. I wanna dance and sing to my heart's content tonight.
b. I want to [_V [_V dance] and [_V sing]] to my heart's content tonight.

[4] 話題化と wh 移動をどちらも補文標識 C への移動であるとする分析もあるが、それでは次のような例が説明できないので、ここでは話題化は IP または CP (あるいは PolP) への付加であると考えておく (cf. Baltin (1982), Lasnik and Saito (1993), Nakamura (1994)).

- (i) I believe that those students we want to be successful.
(ii) ?Those students, what do you think demanded to the administration?

[5] (26) の修正は、暗黙のうちにこの縮約規則が統語論の規則であることを仮定している、ということに注意。

[6] 空範疇の PRO が生じるこの主語の位置は、次に示す「拡大投射原理」(Extended Projection Principle: EPP) によって保証される (Chomsky (1981)).

- (i) 拡大投射原理:
全ての節 (IP) は主語を持たねばならぬ

い。

また、GB理論で仮定される空範疇には、他にも *pro* があるが、本稿の議論には関係無いので省略する。

- [7] (29a) (30a) での $[_{NPe}]$ は、NP 移動の代入先として基底となる D 構造で導入される空範疇であり、この主語の位置の空範疇の存在も PRO と同じように、EPP によって認可される。

- [8] 格付与も、統率条件以外に、(少なくとも)英語では隣接性に従うことが知られている。次のような例は、格付与に対する隣接性条件を破っているために *the letter*, *John* に格が動詞から付与されず、格フィルターによって非文法的となる。

- (i) a. * We read carefully the letter.
b. * We beleive sincerely John to be a genius.

ただ、言語によってはこうした隣接性条件はないと思われるものもあり、この隣接性条件が UG の原理かどうかははっきりしない (cf. Johnson (1990), Chomksy (1995)).

- [9] 次の (i) のように意味内容や θ 役を持たないとされる虚辞 (expletive) の *there* などは PRO の先行詞にはならないので、これらの構文は PRO を持つコントロール構文ではないことがわかる。

- (i) a. * There want $[_{PRO}$ to be three men in the room]
b. * There tried $[_{PRO}$ to be three men in the room]

- [10] Postal and Pullum (1978 fn.7) は *want* が (i) のように *ought* と同じ意味で自動詞、繰り上げ動詞として用いられる方言がイギリス英語にあり、この場合も (ii) のように縮約現象が見られることを観察している。

- (i) a. It wants to rain for a few weeks to get the soil wet.
b. More attention wants to be paid to the things he says.
(ii) a. There want to be a few changes made round here.
b. There wanna be a few changes made round here.

この場合も (ii) の *there* の生起からわかるように *want* は繰り上げ動詞であると分析できる。

- [11] ただし、Bresnan (1976, 1977) のように *wh* 移動を一気に文頭の $[_{+WH}]$ C の指定部に移動する「非有界的」な移動 (unbounded movement) であると考えられる分析においては、そもそも中間痕跡は存在しないので、ここでのような問題は生じないことになる。そのような分析では、(50) の S 構造はそれぞれ次のようになる。

- (i) a. $[_{CP} [_{WH} \text{Which chickens}]_1 \text{ do } [_{IP} \text{ you want } [_{CPE} [_{IP} \text{ PRO to look at } t_1]]]]$
b. $[_{CP} \text{ What}_1 \text{ do } [_{IP} \text{ you want } [_{CPE} [_{IP} \text{ PRO to persuade John } [_{CPE} [_{IP} \text{ PRO to buy } t_1]]]]]]$

この場合、*want* と *to* の間に介在するのは PRO (と空の C) のみであるが、先にみた通り PRO は縮約を阻止しないので、*wanna* 縮約が許されることが正しく予測できる。

この事実だけだと、中間痕跡を認めない、すなわち *wh* 移動の連続循環的適用を認めない分析の方が好ましいことを示唆しているともとれる。しかしながら、Chomsky (1973) 以降、いわゆる長距離 *wh* 移動は、一気に行われるのではなく、(ii) に示すようにそれぞれの節頭の COMP を順次経ていく「連続循環的適用」によって派生されると分析されている。

- (ii) a. *What* do you think that John said that Mary bought ___?
b. $[_{CP} \text{ What}_1 \text{ do } [_{IP} \text{ you think } [_{CP} t_1' \text{ that } [_{IP} \text{ John said } [_{CP} t_1' \text{ that } [_{IP} \text{ Mary bought } t_1]]]]]]?$

上のような *that* 節 CP の場合には CP 指定部が空いているので、順次そこを利用して *wh* 移動が連続循環的に適用され、いわゆる長距離 *wh* 移動が生じるという分析である。

ところで、Bresnan のような非有界移動を認めるのは、理論上好ましくない。たとえば、次の *wh* 島の制約という現象を見てみよう。that 節 CP の場合とちがいで、間接疑問文など途中の CP 指定部が別の *wh* 句などで塞がれている時には、このような長距離 *wh* 移動は許されない。

- (iii) a. * *What* do you think that John asked Bill for whom Mary bought ___?
b. * $[_{CP} \text{ What}_1 \text{ do } [_{IP} \text{ you think } [_{CP} t_1' \text{ that } [_{IP} \text{ John asked Bill } [_{CP} [_{PP} \text{ for whom}]_j \text{ } [_{C+WH}] \text{ } [_{IP} \text{ Mary bought } t_1 t_1]]]]]]?$

連続循環的適用に従えば、wh 移動は最寄りの CP 指定部に移動しなければならないが、そこが塞がれている場合には、その移動ができず非文になるという、変形適用に対する一般の原理から説明が可能となる (cf. Rizzi (1990) の相対的最小性 (RM), Chomsky (1993) の最短連結条件 (MLC) 分析などを参照)。

それに対し、wh 移動が一気に文頭の CP 指定部まで移動するという分析では、ただ wh 疑問文からの他の要素の抽出は禁止されると規定するしかなく、このような例は、説明に困る。

[12] Chomsky and Lasnik (1977, 1978) のように縮約規則適用の前段階に「COMP 内要素の自由削除」により中間痕跡を消去するという分析もあるが、ここではそれは採らない。

[13] たとえ、縮約規則を PF 規則だとしても、空範疇が音声形式 PF に存在すべきなのかという問題がある。PF では音形を持つものだけが実体であるとするのが自然なように思われる。

仮に PF に空範疇があるとしても、その場合には、どうして wh 痕跡だけが、縮約規則を阻止するのかという問題が生じる。この問題については、Chomsky (1993) のように移動規則は移動元の位置で、移動される要素を削除し、空範疇となるその痕跡を残すのではなく、移動先に移動元の要素をコピーするという「移動のコピー理論」も可能性としては考えられる。そうすれば、wh 痕跡が、PRO とは異なり、音形を持つ NP と同じく、PF でも音形を持つこととなり、隣接性条件に抵触し縮約規則の適用を妨げることが自然に説明できる。しかしながら、このコピー理論も、現時点では、NP 移動もコピーを残すかどうかなど、さらに検討を要する問題が多いので、ここでは考察しない。註 18 も参照。

[14] 実際には Jaeggli は次のように述べているが、これは実質的には (58) と同じことである (Jaeggli 1980: 242)。

(i) Case-marked traces function like lexical NPs; that is, like terminal symbols.

この一般化については、さらに Selkirk (1984: 388), Koster (1987: 61) なども参照。

[15] 障壁について、詳しくは Chomsky (1986a), Chomsky and Lasnik (1993), Rizzi (1990) などを参照。

[16] 話題化などの付加変形による非 A 移動の残す

痕跡についても wh 移動の痕跡と同じことが言える。次の例が示すように、話題化変形による痕跡 (束縛変項) も格付与されない位置には現れない。

- (i) a. * John, it seems [*t* to be here]
 b. * John, you are proud [*t* to be here]
 c. * John, Bill tries [*t* to be here]

[17] 空の C も非格位置にある空範疇であるとして、Jaeggli の一般化を拡張することも些末ながら可能である。

[18] この問題については、Chomsky (1993) が提案する「移動のコピー理論」が解決の糸口になる可能性がある。その理論によれば、LF でも wh 移動は元の位置に、あたかもコピーを残したかのようにふるまう現象がある (LF 再構築現象)。しかしながら、このコピー理論は、移動全般には当てはまらない。一般に、NP 移動に関しては LF 再構築現象は見られないことが知られており、コピー理論は NP 移動に関しては誤った予測をする。結局、なぜ wh 移動にだけコピーが必要かという問題が残ることになる。註 13 も参照。

[19] Chomsky (1977) のように、空演算子の構文は S 構造で wh 句が CP 指定部にあり、それが後に (PF で?) COMP 内の自由削除の規則により削除されるという分析も可能。その場合、S 構造で wh 句が格フィルターを満たすために格を要求するので、音形を持つ wh 句の移動と同じ説明が成り立つ可能性はある。

しかし、that-関係節はともかく、wh 句設定の根拠をもたない too-to 不定詞構文などにこの分析を応用するのは問題があると思われる (cf. Browning (1987))。

[20] より正確には、この可視性条件は、次のように LF での連鎖への条件とする必要がある (Chomsky (1981), Chomsky and Lasnik (1993))。

(i) 連鎖は、(その先頭に) 格位置を持つ場合にのみ、 θ 標示に対して可視となる。

[21] PRO 定理を認めると、PRO は統率されない位置にしか生起しないので、構造格は付与できない。そこで、Chomsky (1986b) は PRO は別の種類の格である内在格 (Inherent Case) を持つという暫定的な提案をしているが、単なる規定にすぎず、あまり優れた提案とは言えない。

[22] Chomsky and Lasnik (1993: 561) は、この条

件を次のように LF での連鎖に対する条件として規定している。註 20 も参照。

- (i) 連鎖は、(その先頭に)格位置を持つ場合、あるいは PRO が先頭となる場合に、 θ 標示に対して可視となる。

また、可視性条件に関しては、PRO の問題以外にもさらに次のような問題があることが知られている (Rothstein 1995)。まず、虚辞の *it/there* は、意味を持たない要素だから LF では (同伴する要素による置換により)消去されるので、 θ 役割付与は不要のになぜ格を必要とするのかという問題がある (Lasnik (1993))。同伴する要素の NP/CP が θ 役を必要とするからとも考えられるが、それでは何故、主語の位置のみに虚辞は生起するのかということに答えられない。連鎖の可視性だけを考えれば *it/there* が目的語の位置に生じて良いはずだが、事実はそうではない (cf. Rothstein (1995) の叙述理論による説明)。さらに、項としての CP が、格付与されない位置に生起可能だが (Stowell (1981))、そうすると CP への θ 役割の付与は可視性条件に従わないのかという問題もある。ここでは、不十分ながら、可視性条件はとりあえず NP のみに関与すると規定しておく。

[23] ここでは Lasnik (1993) の提案を挙げる。(103) で「(ある種の)非定形の Tense」とあるのは、Lasnik が、Stowell (1982) の観察を発展させた Martin (1992) に従って、PRO を認可するコントロール補文の *to* と PRO を認可しない ECM 補文の *to* を区別するからである。次のように、PRO が現れるのは一般にコントロール補文においてのみであり、ECM 構文では PRO が生起しない (cf. also Watanabe (1993))。

- (i) a. *John is preferred [*t* to be noisy]
cf. We prefer/like/want [John to be noisy]
b. It is preferred [PRO to be noisy]
cf. *It is liked/wanted [PRO to be noisy]
- (ii) a. *John is illegal [*t* to be noisy]
b. It is illegal [PRO to be noisy]
- (iii) a. *I believe [PRO to be clever]
b. *My belief [PRO to be clever]
- (iv) a. John is believed [*t* to be noisy]
b. *It is believed [PRO to be noisy]

この 2 種類の *to* の違いは、さらに VP 削除や VP 前置の際に空範疇を認可できるかどうかという違いにも微妙だが現れる。まず VP 削除の例を見てみよう (Lasnik 1993: 64)。

- (v) a. John tried to be courageous, and Mary tried to __ also
b. I want John to be courageous, and I want Mary to __ also
- (vi) a. ?*I believe John to be courageous, and I believe Mary to __ also
b. ?*John is believed to be courageous, and Mary is believed to __ also
c. *John said there was likely to be a solution, and there is likely to
- Lasnik はさらに、VP 前置でも同じような差が見られるという (Rizzi (1990))。
- (vii) a. ... and [fix the car], he tried [PRO to *t*]
b. ?... and [know the answer], I want [Bill to *t*]
- (viii) *... and [know the answer], I believe [Bill to *t*]

このように、ECM 構文の *to* と違って、コントロール構文の *to* は VP 削除や VP 前置による空の VP を認可することもできる。そして、このことは Stowell (1982) が指摘するように、コントロール構文の *to* は、「未完了」を表すように、意味的・統語的にある種の機能を持ち、そのことが PRO を認可することを可能にしていると考えられる。一方、ECM 構文での *to* はこうした機能を持たず、そのことが PRO の認可をできなくしていると言える。

また、このように 2 種類の *to* を仮定する分析では、統率という概念に基づいた PRO 定理は、不必要になり、従来のように ECM 補文は IP、コントロール補文は CP という区別をする必要がなくなり、どちらも同じ句範疇 IP であるということが可能になる。そして、このことは従来問題とされてきたいわゆる「S パー削除」のような操作も無くすことを可能にする。

[24] もちろんその場合には、後述のように、空格の付与は別の方法によらねばならないことになる。また、PRO 定理も仮定できないことになる。もっとも、PRO 定理については、最近の極小主義では「統率」という概念は用いないので、このみち PRO 定理は、このままの形では存在し

- ないことになる (Chomsky (1993, 1994, 1995), Lasnik (1993), Watanabe (1993)).
- [25] Baltin は, Abney (1987) に従い, 名詞句は NP の上に機能範疇の Det を主要部とする DP があるとす DP 分析を採用している. 以下, 本節では名詞句 NP を Baltin に従って DP と表記する.
- [26] 二次述部の内部構造に関しては, 単独の AP となっている説 (Williams (1980), Rothstein (1983), Chomsky (1986b など)) と, 例えば, [_{IP} PRO AP] のように小節 (small clause) 構造をなしているとする説 (Chomsky (1981), Stowell (1983), Hornstein and Lightfoot (1987) など) で意見が分かれるが, 現在では, 単独の AP であるとする分析が一般的である. その場合には, Chomsky (1986b) のように同一の項に対する多重 θ 標示を認めるなど θ 規準が弱められねばならない.
- [27] Baltin は, 動名詞についても, 次のように VP 内に PRO が必要だとしている.
- (i) Fred's eating steak [_{NP} DET VP]
(ii) [_{NP} Fred [_D's] [_{VP} PRO [_V' eating steak]] (Baltin (1995: 237))
- Abney (1987) などのように, 動名詞においても IP でと同じように, 主語の Fred が VP 内から DP 指定部に移動(一種の繰り上げ)をしたと分析する者もいるが, Baltin はそうした移動はないと考える. その理由は, 次のように DP 指定部には θ 役割を持たない虚辞は生起しないからである.
- (iii) a. There are five people in the room
b. *there's being five people in the room
- [28] Baltin は FQ が動詞前修飾語 (preverbs) と同じ分布を示すことから, Sportiche (1988) とは異なり, FQ が主語名詞句の移動によって遊離させられるのではなく, 始めからそれぞれの位置に付加詞として基底生成されると分析している. そして FQ と ever はその語彙的特性から述部 X' へのみ付加されるという制限を持つとする.
- FQ の基底生成に関してはさらに次のような例をあげる Jackendoff (1981) も参照せよ.
- (i) a. The men had all three of them been in love with Garbo (Jackendoff 1981)
- b. *[All three of them the men] had been in love with Garbo.
- (i) のような例では, Sportiche のような移動理論をとると, (ib) が示すように FQ の元になる DP が存在しないことになり問題である. 同じことが次の (ii) や (iii) についても言える (Baltin (1980)).
- (ii) a. The men had [_{QP} all three] been admirers of Garbo. (Baltin 1980)
b. *all three the men
- (iii) a. The lion, the bear, and the monkey are all mammals.
b. *All the lion, the bear, and the monkey are mammals.
- ただし, (ii) については the all three men や all three of the men という表現は可能である. しかしこの構造は Sportiche の分析の基底構造にはなれないことに注意.
- [29] Baltin はコントロールを叙述関係 (predication) と同じ関係であると見なして, PRO のコントローラが叙述の主語と見なされる提案している (cf. Williams (1980)).
- ついでに述べておくと, to の右に FQ が生起する場合は, VP 指定部の PRO が V' を最小に c 統御し, それを述部として認可するので, その V' に FQ の all が付加されることになり, 問題はない.
- (i) The men promised me [_{IP} to [_{VP} PRO [_V' all [_V' resign]]]]
- [30] 可能性としては, これらの場合も実は繰り上げ構文ではなくコントロール構文と考える途がある. しかし, 先にも見たとおり, 次の例文が示すように, これらが繰り上げ構文であることは否定できないので, それは正しくない.
- (i) There's gonna be a exciting race.
- [31] だからと言って, PRO が VP 指定部の位置 (語彙範疇の指定部の位置) で空格を認可されるという Baltin の提案は, FQ 現象の分析や二次述語の分析においては有効であり, 究極的に正しいかも知れない. 我々はこれを否定するものではない.
- EPP の要請によって, 語彙的 DP も PRO も IP 指定部に移動する Chomsky らの分析では, Baltin の指摘する FQ の事実もうまく説明できない.
- 以下に, 検討する主要部移動による縮約現象

の分析では、隣接性の条件は HMC から説明されるので、空格を持つ PRO の位置は VP 指定部でも IP 指定部でも関係ないが、PRO が VP 指定部の位置（語彙範疇の指定部の位置）で空格を認可されるという提案は、正しいかも知れない。EPP との関係は、今後も考察に値する。

- [32] ECP は一般に痕跡に対する制約であるとされるが、Zagona (1982, 1988), Lobeck (1995) など痕跡以外の基底生成される空範疇も（一般化された）ECP に規制されるとする者もいる。Lobeck は空の VP を pro として分析する。
- [33] 一方、時制を持つ [+Tense] I は独立して VP を適正統率できるので、 θ 役割転送は必要とせず、付加部節でも VP 削除は許される。
(i) John loves to cook, and he got some new pots [so that he can _[VPe]]
- [34] 主語の位置の不定詞などにおける *to _[VPe] と not to _[VPe] の差も、not が NegP という機能範疇の主要部であると仮定し、to が not へ主要部移動できるとすれば、同じように分析できる (cf. Zwicky (1982), Lobeck (1995), 岩本 (1994)).
- [35] CED 効果には「付加部条件」もあるが、付加部の不定詞節における VP 削除は、 θ 転送の条件から、すべて非文となるので、VP 削除に関する to の主要部移動の関与については証拠とならない。
- [36] 補文標識 C の for と同じで prepositional feature を持つのかも知れない。
主要部移動にも、句（最大投射）XP の移動と同じく a) 代入と b) 付加の 2 種類があると考えられるが、仮に to が [_C ϕ_{for}] に付加できるとしたらどうなるか？ この場合も、そこから to のみが、主節の V へさらに主要部移動することは禁止される。そのためには、Roberts (1991) の言うような、いわゆる偏出・再編入 (excorporation) は禁止されると仮定しなければならない。また、付加によってできた [_C to-_[C] ϕ_{for}] の複合体が V へ移動しても、to は V に依存できないと仮定する（この問題は、後述の空の to 移動分析では、この複合 C は接辞としての性質を持たないので、wanna に付加されても素性の照合ができず、排除されると説明できる）。
- [37] この場合の主要部移動は、上でみた音韻的再構造化規則のための to 移動とは別のものであると仮定する。というのは、wanna 縮約では、VP

は空ではないので、to が V の want に依存する必要はないからである。また、上での to 移動は義務的操作であったが、縮約にかかわる主要部移動はその適用が随意的な規則となる。

極小主義の枠組みでは、こうした随意的な規則は派生の経済性の原則と矛盾するので、好ましくないが、後述 7.3. の接辞としての空の to が移動するという分析を採れば、want to と wanna はそれぞれ基底構造から異なったものとされるので、こうした規則適用の随意性の問題は生じないことになる。

- [38] Zagona (1988) もこの事実は指摘しているが、説明はしていない。
- [39] こうした助動詞縮約を、I の主語 NP/DP への付加移動による分析する可能性もあるが、その場合には HMC 違反が生じていることになる (cf. Lobeck (1995)). ここでは、空の I の移動によるものではなく、指定部-主要部一致の一種として分析できると考える。すなわち、通常の主語 Bill が [+Tense, (Agr)] の I と一致するのに対して、助動詞縮約の場合には、Bill's という IP 指定部は、空の I, [_Ie] が一致しなければならないと考える。
- [40] 逆に wanna, usta などの縮約形も空の to との照合によって認可されるとも、考えられる。例えば、次のような例は、明示的な to は wanna を認可しないことを示唆しており、それを支持する証拠とできるかもしれない。
(i) *I wanna to go.
もしこれが正しければ、この縮約形の認可条件は Rizzi (1992) の提案する WH 規準に似ていると言える。もっとも、指定部-主要部一致については一般にこうした両方向性が見られるのが当然ではあるが。
- [41] さらに、(i) のように副詞だけでなく PP の介在も縮約を阻止する。
(i) a. I want from the bottom of my heart to go to the game this evening.
b. *I wanna from the bottom of my heart go to the game this evening.
- [42] こうした例の文法性は、格理論に依存した Jaeggli の分析にとっても、重大な問題となる。一般に副詞要素は音形を持っていても、項ではなく、格付与される必要はないからであり、従って、隣接性条件を仮定する分析では、こうした

副詞要素は音形を持つ語彙的 NP と同様に、縮約を阻止するとまとめられるだろうが、格の有無という点で不一致が生じ、Jaeggli が主張するような格を持つ要素のみが縮約を阻止するというエレガントな一般化は成り立たなくなる。一方、我々の主要部移動分析では、語彙的 NP の問題は、それ自体が縮約を阻止するのではなく、それに格を付与する C によって空の to の移動が阻止されることとなり、こうした副詞要素についての問題とは別扱いになる。

さらに、次のように副詞が不定詞節に属する場合にも同様の問題が生じるかもしれない。

- (i) a. We want always to be good.
 b. ?*We wanna always be good.
 (ii) a. We want [PRO always to be good].
 b. We wanna [PRO always ϕ_{to} be good].

しかしながら、この場合には always が to の右、VP 付加の位置にあるという分析も可能であり、その場合には隣接性条件は無関係であると言える。

- (iii) We wanna [PRO ϕ_{to} [_{VP} always be good]].

[43] 当然、統率条件は、主要部移動からの自然の帰結なので、両方の方言に当てはまる。

参 照 文 献

- Abney, Steven Paul (1987) The English Noun Phrase in its Sentential Aspect, Doctoral dissertation, MIT.
- Andrews, Avrey (1978) Remarks on To Adjunction, *Linguistic Inquiry* 9: 261-267.
- Aoun, Joseph (1979) Indexing and Constituency, ms. MIT.
- Aoun, Joseph and David W. Lightfoot (1984) Government and Contraction, *Linguistic Inquiry* 15: 465-473.
- Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Change*, University of Chicago Press.
- Baltin, Mark R. (1980) On the Notion "Quantifier Phrases," *Linguistic Inquiry* 11: 247-249.
- Baltin, Mark R. (1982) A Landing-Site Theory of Movement Rules, *Linguistic Inquiry* 13: 1-38.
- Baltin, Mark R. (1995) Floating Quantifiers, PRO, and Predication, *Linguistic Inquiry* 26: 199-248.
- Bresnan, Joan, W. (1971) Contraction and the Transformational Cycle in English, ms. MIT.
- Bresnan, Joan, W. (1972) Theory of Complementation in English Syntax, Doctoral dissertation, MIT.
- Bresnan, Joan, W. (1976) The Form and the Function of Transformations, *Linguistic Inquiry* 7: 3-40.
- Bresnan, Joan, W. (1977) Variables in the Theory of Transformations, in P.W. Culicover *et al.* (eds.) 1977, 157-96.
- Browning, M.A. (1987) Null Operator Constructions, Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam (1973) Conditions on Transformation, in S.R. Anderson and P. Kiparsky (eds.) *A Festschrift for Morris Halle*, 1973, 232-286.
- Chomsky, Noam (1977) On WH-Movement, in P.W. Culicover *et al.* (eds.) 1977, 71-132.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding: The Pisa Lectures*, Foris.
- Chomsky, Noam (1986a) *Barriers*, MIT Press.
- Chomsky, Noam (1986b) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin and Use*, Praeger.
- Chomsky, Noam (1993) A Minimalist Program for Linguistic Theory. *MIT Occasional Papers in Linguistics* 1.
- Chomsky, Noam (1994) Bare Phrase Structure. *MIT Occasional Papers in Linguistics* 5.
- Chomsky, Noam (1995) Categories and Transformations, ms. MIT. To appear in *The Minimalist Program*, MIT Press.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1977) Filters and Control, *Linguistic Inquiry* 8: 425-504.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1978) A Remark on Contraction, *Linguistic Inquiry* 9: 268-274.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1993) Principles and Parameters Theory, in J. Jacobs, A. von Stechow, W. Sternefeld, and T. Vennemann (eds.), *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research*, Walter de Gruyter.

- Culicover, Peter W., Thomas Wasow, and Adrian Akmajian (eds.) (1977) *Formal Syntax*, Academic Press.
- Hornstein, Norbert, and David Lightfoot (1987) Predication and PRO, *Language* 63: 23-52.
- Huang, C.-T. James (1982) Logical Relation in Chinese and the Theory of Grammar, Doctoral dissertation, MIT.
- 岩本弘道 (1994) 「否定文と節の構造: not の統語論的位置づけ」神奈川工科大学研究報告 18-A (人文社会科学編): 39-64.
- Jackendoff, Ray S. (1981) On the Constituent Structure of *All Three of the Men*, *Linguistic Inquiry* 12: 150-151.
- Jaeggli, Oswald A. (1980) Remarks on *To* Contraction, *Linguistic Inquiry* 11: 239-246.
- Johnson, Kyle (1990) Object Positions, *Natural Language and Linguistic Theory* 9: 577-636.
- Kaisse, Ellen M. (1985) *Connected Speech: The Interaction of Syntax and Phonology*. Academic Press.
- Koster, Jan (1987) *Domain and Dynasties: The Radical Autonomy of Syntax*, Foris.
- Lasnik, Howard (1990) Syntax, in D.N. Oscheron and H.Lasnik (eds.) *Language: An Invitation to Cognitive Science*, Volume 1, 5-21, MIT Press.
- Lasnik, Howard (1993) Lectures on Minimalist Syntax. *University of Connecticut Occasional Papers in Linguistics* 1.
- Lasnik, Howard and Saito Mamoru (1992) *Move α : Conditions on its Application and Output*. MIT Press.
- Lasnik, Howard and Juan Uriagereka (1988) *A Course in GB Syntax: Lectures on Binding and Empty Categories*. MIT Press.
- Lightfoot, David (1976) Trace Theory and the Twice-Moved NPs, *Linguistic Inquiry* 7: 559-582.
- Lightfoot, David (1977) On Traces and Conditions on Rules, in P.W. Culicover *et al.* (eds.) 1977, 207-237.
- Lobeck, Anne (1995) *Ellipsis: Functional Heads, Licensing, and Identification*. Oxford University Press.
- Lobeck, Anne, and Ellen M. Kaisse (1984) On the domain of locality conditions, *WCCFL* 3: 170-178.
- Maling, Joan (1976) Notes on Quantifier-Postposing. *Linguistic Inquiry* 7: 708-718.
- Martin, Richard (1992) On the Distribution and Case Features of PRO, ms. University of Connecticut.
- Nakamura, Masaru (1994) Topicalization, Neg-Preposing, and Locative Preposing, in M. Nakamura (ed.) *Current Topics in Japanese and English Syntax*, Hitsuji-Syobo (ひつじ書房).
- Ouhalla, Jamal (1994) *Introducing Transformational Grammar: From Rules to Principles and Parameters*, Edward Arnold.
- Postal, Paul M. (1974) *On Raising*. MIT Press.
- Postal, Paul M. and Geoffrey K. Pullum (1978) Traces and the Description of English Complementizer Contraction, *Linguistic Inquiry* 9: 1-29.
- Postal, Paul M. and Geoffrey K. Pullum (1982) The Contraction Debate, *Linguistic Inquiry* 13: 122-138.
- Pullum, Geoffrey K. and Paul M. Postal (1979) On an Inadequate Defense of "Trace Theory," *Linguistic Inquiry* 10: 689-706.
- Radford, Andrew (1981) *Transformational Syntax: A Student's Guide to Chomsky's Extended Standard Theory*, Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press.
- Rizzi, Luigi (1991) Residual Verb Second and the WH-Criterion, ms. University of Geneva. To appear in A. Belletti and L. Rizzi (eds.), *Parameters and Functional Heads: Essays in Comparative Syntax*, Oxford University Press.
- Roberts, Ian G. (1991) Excorporation and Minimality, *Linguistic Inquiry* 22: 209-218.
- Roeper, Thomas (1987) Implicit Arguments and the Head-Complement Relation, *Linguistic Inquiry* 18: 267-310.
- Rothstein, Susan D. (1983) The Syntactic Form of Predication, Doctoral dissertation, MIT.
- Rothstein, Susan D. (1995) Pleonastics and the Interpretation of Pronouns. *Linguistic Inquiry* 26: 499-529.
- Schachter, Paul (1976) A Nontransformational

- Account of Gerundive Nominals in English, *Linguistic Inquiry* 7: 205-241.
- Selkirk, Elizabeth (1984) *Phonology and Syntax: The Relation between Sounds and Structure*, MIT Press.
- Sportiche, Dominique (1988) A Theory of Floating Quantifier and Its Corollaries for Constituent Structure, *Linguistic Inquiry* 19: 425-449.
- Stowell, Tim (1981) The Origins of Phrase Structure, Doctoral dissertation, MIT.
- Stowell, Tim (1982) The Tense of Infinitives, *Linguistic Inquiry* 13: 561-70.
- Stowell, Tim (1983) Subjects across Categories, *The Linguistic Review* 2: 285-312.
- Travis, Lisa deMena (1984) Parameters and Effect of Word Order Variation, Doctoral dissertation, MIT.
- Watanabe, Akira (1993) AGR-Based Case Theory and its Interaction with the A-Bar System, Doctoral dissertation, MIT.
- Williams, Edwin (1980) Predication, *Linguistic Inquiry* 11: 203-238.
- Zagona, Karen (1982) Government and Proper Government of Verbal Projections, Doctoral dissertation, University of Washington.
- Zagona, Karen (1988) Proper Government of Antecedentless VP in English and Spanish, *Natural Language and Linguistic Theory* 6: 95-128.
- Zwicky, Arnold (1981) Stranded *to* and Phonological Phrasing, *Linguistics* 20: 3-58.